8
19

老子講義

佐藤牧山著

始

牧山 佐藤楚材 著

老子講義

東京 朝陽舍
東雲堂 發行

大正
12. 3. 7
內交

序

始余在昌平黌寺門靜軒將去駒籠勸余嗣講帷時余一貧如洗謀之大沼竹溪翁翁大以爲可慫慂之乃僦屋於駒籠龜田鵬齋故居近傍前對老杉後則密竹掩映破屋數間蕭然几案始講老子後移居市谷亦屢爲生徒講之生徒私有所筆記久傳播塾中互有異同亦嘗取而一正其誤三輪文者家世業鬻書善讀書近入我門聽講老子二次自言至於某章忽然有所悟因分服部士辰請刊筆記寂後國貞縣令覽之曰老子諸注多憒憒茲極簡明可以問世推奬過當余不敢當會聞有謀竊寫刊之者懼其傳訛陷人大澤謀之男雲韶乃允三輪文之請文躍然從事乙夜篝灯手自謄寫以

附剞劂氏。改稱講義。從其請也。往者德川二位公。在尾張藩。余爲侍講。嘗進講老子。後命錄上其說。八十一章。分爲若干卷。公誤珍藏。不肯輒示人。其得覽者。大脇弼教。辰巳守而已。嘗謂余曰。生平得力於老子者居多。意當公之時。紛紛多故。履險涉危。蹇蹇匪躬。習坎心亨。豈有所得於五千言之効乎。而大脇弼教。亦曰。余之有今日。老教之力也。余經生也。非善老子學者。何能超超發揮玄旨。朱晦菴曰。老子王注。巧而晦。如余所說。拙而晦。然二位公之言如是。而弼教之言亦如是。豈所謂神而明之存乎其人者耶。果然。余不能無望於讀者也。回思余居駒籠。距今六十餘年。前二三十年。嘗一經其地。舊居變爲酒家。雪泥鴻爪。不知今復其如何。嗟乎老矣。昌平舊業將荒。措而不顧。乃獨取茲小言詹詹者。公之於世。竹溪諸人。其以爲可耶。以爲不可耶。想當大笑於芙蓉閣上也。

明治十有七年甲申冬十一月

尾張牧山佐藤楚材撰於東京谷中北巷僑居時年八十有四

例言

一原稿係生徒筆記今改稱講義稱著從刻者之請也講義一依王注如有難依者博考他說從其可者各注明其下不敢杜撰

一講義往往全用漢語似不倫尚簡便也讀者勿以和文法建之

一講義間引用俚言雜書莊子曰每下愈況不得不然也非樂然也讀者諒之

一原稿蕪雜再四校訂稍屬齊整市野天籟淺野三龍服部士辰三子之力也

一第十三章極難解講義折衷諸說未免強解闕疑可也

一老子漢人已稱深遠難識淺陋講義何能發明萬一斯特其入深遠之粃識耳

一尚謙虛戒驕滿此五千言第一義也余嘗謂莊子失意無聊之人可

讀。老子。得意快活之人可讀。信對症之藥石也。夫古聖賢。臨深履薄。諄諄誨言。莫非尙謙虛戒驕滿。無奈世人大率庸罔念聞。而人情好異。老子稍說得異樣。頗有足聳動人聽者。是吾所以欲人讀老子也。豈以藥石爲粱肉哉。吾不得已也。

佐藤楚材識

牧山　佐藤楚材著

老子講義

東京　朝陽舍發行
東雲堂發行

佐藤牧山先生小傳

佐藤氏、名は楚材、字は晋川、又雲齋と號す。尾張國中島郡山崎村に生る。昌平黌に入り、二十五歳業を卒へ、寺門靜軒が駒込の塾を繼で之を教授す。後、尾張侯に召され、儒者に列し、物頭格に進む。藩の弘道館及び明倫堂に教授し、維新の後東京に出で、斯文學會の講師たり。明治二十四年二月二十四日沒す。年九十一。著す所、清朝史略、中庸講義、老子講義、牧山樓文集、牧山樓詩集、日本政記註、周易叢說、二十二史鈔等あり。その牧山と號するは、生地小牧山に近きを以てなりと。

（大日本人名辭書による）

老子講義卷一

牧山佐藤先生著

男　雲韶
服部　拱　同校

總論

老子名は耳、字は伯陽、一に云ふ字は聃、姓は李氏なり、其生まれながらにして髪白きを以て老子と稱す、孔子と同時代にて、少しく先輩なり、周の守藏室の吏たりし時、孔子往て禮を問ひ、老子を稱してそれなほ龍のごときかとの玉へり、其後、周の衰ふるを見て立ち去り關に至る、關令の尹喜、天に紫の氣の浮べるを見て、異人通るべしと物色せし折柄、老子青牛に乘りて關を過ぎんとす、尹

喜曰、子は將に隱れんとす、强ひて我が爲めに書を著せと、是に於て老子二篇の書を著し、尹喜に與へて去る、其終る所を知らず、史記幷に高士傳等に出づる所如此、この外、後漢書に、老子天竺にゆき釋迦佛となり、佛法を說き弘めたりと云ふ、又莊子に載せたる種々の寓言、その餘雜書に奇怪を云へる多し、皆信ずるに足らず、たゞ禮記に載せたる孔子の語に、吾聞諸老聃、などあるは、誠なるべし、然るに世の人、孔子の禮を老子に問へることを疑ふ者多し、然れども孔子は老子風なる原壤を友とせり、禮を老子に問ふ、怪むにたらず、又今傳はる所の老子の書は、後人の僞作ならんと疑ふもあり、これ魏の崔浩より始まれり、今たゞ老子の著す所とす、儒家の書は十三經と稱し、佛家は一切經と稱し、八萬四千の法藏などと云へり、然るに老子はたゞ上下篇五千字の書を以て、儒家佛家に抗衡して萬世に行はる、二篇の深遠なる、色をも香をも知る人ぞ知る、少見多怪、見駱駝謂馬腫背、必しも疑はず○老子の道、老子に創まるにあらず、然れども黃老と稱して、上古の黃帝に始まると云へるは、信ずべからず、もと周易より出でたるものと云ふの說は、然るべし、其たしかに書籍に於て考へつべきは、周の太公望、齊の管仲、越の范蠡、まさしく老子の道に同じ、しかも老子以前の人なり、其外、家語に載する所の金人の銘、亦老子の說なり、これに由て之を觀れば、そのかみかゝる說の世に多く有りしこと知るべし、老子書中に、每々古語を引けり、これ亦世に傳はれる書も多くありしなり、然るに今老子の道と稱することは、猶堯舜文武よりの道を孔子に至て大成せるが故に、孔子の道と稱するがごとし、さてその老子の道の流傳せること、孔子の故人原壤は、老子流

の人なりと註家も云へり、又論語中の或問「以德報怨如何」けるを、これ老子の書に出づと註せり、これにても老子同時に在て、すでにその道の世に行はるゝこと知るべし、其後、戰國の時は、列子莊子申子韓非子の輩、ともに老子に本づきて各その說をのべたり、漢に至ては、景帝文帝曹參等、專ら老子の道を以て天下を治む、その他張良陳平の輩、亦皆老子を學びたる人なり、晉の世に至て老莊と稱して、天下一般に行れ、老子を莊子とひとしきものとのみ看做したり、名臣王導の雅量、謝安の鎭靜、みな老莊の益を得たるなり、竹林の七賢など、放逸に流れたるは、莊子の跌蕩を善く學ばざるの過ちなり、唐の時、天子の姓李氏なり、老子も李氏なるが故に始祖なりと云てこれを尊び、玄元皇帝と諡し、廟を建てこれを祀る、この時、莊子も南華眞人と諡し、列子も冲虛眞人と諡す、陸德明諸經の音義を著し、又老子莊子の音義を著し、經書にひとしくす、其時世の尊ぶこと、かくの如し、宋の時、蘇東坡兄弟の如きを始め、大抵老子の學なり、その著せる物にて知るべし、つら〳〵漢晉より唐宋に至るまでを通觀するに、漢の君臣は、老子の淸淨無爲の意を得たり、晉の時、淸言と稱して老莊を談ずるを事とすれども、老子に於ては、僅に恬淡の意を得たり、唐は尊崇するのみ、宋に至ては、禪理とひとしく看做せり、これその大略なり、夫れかくの如く老子以來二千餘年、道家の敎と稱し、連綿として世に行はれ、其敎書參同契黃庭經等を始めとし、數百千卷あり、後に至て、儒門佛家と相並びて三敎と稱す、しかも儒佛は時によりて盛衰あり、ひとり老子の道敎のみは、常に盛んに行はる、某宮某觀など云へるは、皆道敎の道場なり○老子の道、そのかみ列子莊子の寓言、申不害韓非

の刑名の學より、修養家兵學家の類に至るまで、老子に本づかざるはなし、凡そ諸子百家の祖なり、獨諸子百家の祖のみに非ず、儒家の如きも、たゞ漢の董仲舒、唐の韓退之、宋の程子朱子の數人のみぞ、老子の說にあらぬのみ、古今學者、道の極意を說くに至ては、みな老子の說なり、和學の如きも、その道をとくは、全く老子の說にひとしきけり、その道たる、謙虛を貴ぶを以て、易老と稱して易と同うし、又其恬淡を貴ぶを以て、老莊と稱して莊子に同うすること、昔よりこれあり、然れども易にはまゝ同じき旨有りと云はゞ有るべし、莊子とは黑白の違ひなり、莊子を學びたるは、平易なる人となるべし、老子を學びたるは、思慮深くして外より測られざる人となるべし、余嘗て云へり、孫子は、大將のみ讀むべき書にて、雜兵に讀ましむべからず、老子は、王公のみ看玉ふべき書にて、賤者には讀ましむべからずと、老莊の分別をみるべし、老莊を同じものに思ふは、老子の主意を知らざる人なり、抑その道の主意は、莊子は跌蕩なり、老子は收斂なり、清淨と說き、虛無と說き、雌伏と說き、不爲天下先と說き、千變萬化なれども、その意はみな同じ、道ばたの木槿は馬に喰はれけり、俳句なれども、よく老子の戒めをのべたり、その用は因應を以てす、いかなる大事も、この術にて、我は手を袖にしてやすゝとなし得るなり、太史公の老子の道は、虛無因應、變化於無爲と論ぜしは、さすがに老子ずきの人ほどありて、よく老子を知て云たり、尙下文諸家の說を並せ考ふれば更に明了なり、

朱子曰。莊子跌蕩。老子收斂齊足。斂手。

又曰。伯夷微似老子。

又曰。張良得老子妙處。

又曰。如漢文帝曹參。便是用老子之效。然又只是用老子皮膚。

朱子の意は、清淨無爲などは、老子の極意に非ず、皮膚の如し、骨髓は、欲爲之先。必先爲之後。將欲喻之。必固張之。の類にて、これその術の深き所とせるなり、故に張良を以て老子の妙處を得たりとす、

又曰。王導謝安。何曾得老子妙處。

これ亦王導謝安の恬淡は、老子の皮膚と云へるなり、

眞德秀曰。老子將欲喻之。必固張之。此陰謀之言也。

陰謀は秘密の計略なり、范蠡陳平などに陰謀多しと云へり、范蠡の吳王夫差を驕慢せしめて亡ぼしたる、全くこの術なり、朱子の老子の道、姦智に流るゝは、此類を云ふなり、

蘇子由曰。予解老子。僧道全笑曰。皆佛說也。

このこと然るや否やを知らず、末書に、清淨經の大道無形、生育天地、大道無名、長養萬物、吾不知其名、强名曰道を引けり、これ等の語は、全く老子に同じき所あるか、

白樂天曰。欲使人情儉樸。時俗清和。莫先於體黃老之道也。

以上みな老子の道を論ぜるの語なり、能く味ふべし、

老子上篇

老子は書名なり、道德經も書名なり、老子道德經と題せる本多し、重複して誤りなり、その經と稱するは、漢の景帝尊びて經と稱すと云へり、一本に上篇を道經と稱し、下篇を德經と稱す、恐らくは當らず、

老子の書の註、唐の陸德明の經典釋文によりてみれば、昔聞人の著せる多し、今多く傳はらず、王弼の註、朱子の云へるは、孟子の趙註は拙而晦、老子の王註は巧而晦と、實に其樣あり、然れども經典釋文にも、王弼の註、妙得虛無之旨と云ふ、今に至るまで、天下通じて行はるゝは王註なり、今亦大抵其意によりて講述す、この外、世に傳はれる舊きものには、河上公の註あり、河上公作りて漢の文帝に授くと云ふ、こは託言なるべし、然れども古書は古書なり、格言多し、後世の註家に至ては、蘇子由呂吉甫等の註、面白くこけるあり、然れども郢書燕說、こき深めたるも少からず、いよ〳〵佛理に近かるべし、又近人の註に、儒家に同じとしたるもあり、夫れ老子、佛に似たるはありもすべし、儒には似ず、かの太上玄元皇帝、腐儒の糟粕を嘗め、その陳言を述ぶる老父にあらず、儒も亦詩書易禮春秋、その敎足れり具はれり、何にことかき老子の助言を借らん、それ老子はおのづから老子にて、儒によらず、佛によらず、天上天下、唯我獨尊、天地間別に一家の敎なること、天下古今の定論なり、

首章

〔章意〕此章は道の體用并びに道を知るの工夫を明せり、老子の意、この一章に盡くと云ふべし、

道可道非常道名可名非常名

〔節意〕此一節は、聖人の道を破したるなり、凡そ己の說を立てんとするには、先づ他の說を破することなり、然らざれば己の

説立たざればなり、念佛無間禪天魔の語の如きもこれなり、佛家にはこれを破立と云へり、常にあることなり、

〔字訓〕常とは不變不易一定したるを云ふ、註家のこの字を説き深めたる多し、今從はず、たゞ眞の字を以て説く、こゝ聖人の教を破するのみ、必しも故に高妙にせず、

〔解義〕正さゞれば道あらはれず、吾先づ世間聖人の教を正すべし、夫れ聖人の教には、道は仁義と云へり、仁義と云へば、仁はあはれむ義は正すと、その形ありて擧げ示しつべし、それ如此道のこれぞ道なりと云て擧げ示しつべきものは、一定不變の眞の道にあらず、こはもと聖人己が心もて立てたるものゝみ、道は形器に渉らざるものにて、無形ものなり、以上道可道非常道なとく又仁義と云へば名あり、それ名のこれぞ名なりと云て擧げ言ひつべきものは、一定不變の眞の名にあらず、こはもと聖人己が心もて名づけたるものゝみ、道は言句に落ちざるものにて、無名ものなり、以上名可名非常名なとく

無名天地之始。有名萬物之母。

〔節意〕此一節は、老子みづからその道を明せるなり、

〔字訓〕無名とは、天地未だ開闢せざる時をさして云ふなり、天あれば天と云ふ名あり、地あれば地と云ふ名あり、物あればそれ〳〵の名あり、故に無名と云へば、天地もなく萬物もなき時を云ふ、即ち天地未だ開闢せざる時なり、有名とは、物あり名あり、天地開闢せる時を云ふなり、母とは育つるの義にこれり、

〔解義〕夫れ天地自然の眞の道と云ふものは、そも〳〵此天地

混沌として未だ開闢せざる時に在ては、（二字なとく無名の）清めるは升りて天となり、濁るは下りて地となり、天を生じ地を生じ、天地の始めとなる物なり、（この四字なとく天地之始）すでに天地開闢せる時に至ては、（二字なとく有名の）生ふものは生へしめ、實るものは實らしめ、萬物を育てやしなひて、萬物の母となる物なり、（この四字なとく万物之母）これ何物なりや、これぞ吾が所謂天地自然の眞の道と云ふものなる、されば道と云ふものは、この涯り知られぬ天地を生じ、ありとあらゆる萬物を育てやしなふものなり、豈すさまじきものならずや、

故常無欲以觀其妙。常有欲以觀其徼。

〔節意〕此一節、人の道を心得べき樣を云ふなり、その妙とは道の體なり、その徼とは道の用なり、人の心靜かなる時に道の體を心得べく、動くときに道の用を心得べきことを示すなり、

〔字訓〕欲とは心にかくあらんとのぞみのたつことなり、無欲とは一念不動の時心中無一物なるなり、有欲とは一念已に動てかくあらんとするを云ふなり、其とは道をさして云ふなり、妙は古妙とかく、かすかと訓ず、言葉に述ぶべからず、心に思ひ議るべからず、心も言も絶えはてたるを贊めて妙と云ふ、佛經に不可思議とは、妙のことなるべし、妙の上更に云ふ樣なきなり、徼とはほとりと訓ず、終の義となる、轉じて物のできあがりたることを云ふなり、觀はもと目に見ることなれども、こゝは心の中に觀念することなり、

〔解義〕人もし道を知らんとせば、吾が心のぞみなく靜かなるとき、道の微妙なるを觀念してみるべし、吾が心のぞみありて

動くとき、道によりてその事成るを觀念してみるべし、如此觀念すれば、道の體用心得つべきなり、以上本文を了るとき此一節、言ふ心は、心靜かなる中より萬事出づ、道亦靜かなる中より萬物生ず、故に吾が心靜かなるとき、道の妙を觀念すべし、吾が心のぞみあるとき、道の無によらざればそのこと成らず、譬へば物を見んとするに、眼と物との間無なるによりて見ゆるが如し、故に吾が心有欲のとき、道の無なるよりして事の成就するを觀念すべしと云ふなり、

此兩者。同出而異名。同謂之玄。玄之又玄。衆妙之門。

〔節意〕 此一節は、道を賛美したるなり、

〔字訓〕 兩とは天地之始と萬物之母との二つなり、玄はくろき色なり、凡そ深くして測り知られぬものは、くらく見ゆるなり、それ故におく深きことを玄と云ふなり、この字老莊の書に多く、儒書には常にいはざることなり、同謂之玄、この玄の字は、すぐに道をさして云ふなり、この下の王註、脫文あり、宇惠本には脫文あるを知らずしてむりに訓點す、故不可讀、余の改正本に就て見るべし、又とはそのうへなり、衆妙は卽ち萬物のことなり、萬物のさまは思ひはかられざるものなり、故にこれを衆妙と云ふなり、門とは出づる所なり、

〔解義〕 さても貴ぶべきものは道なり、天地の始めとなり、萬物の母となる、この兩つの者、同じく道より出でたるものにて、始めと名づけ、母と名づけ、其名を異にするまでなり、此兩者同出而異名をとくその始めと母と二つの物、同じく出づるその本は、黃帝の智も測るあたは

ず、離朱の眼も見るあたはず、いと玄なる深きものと謂ふべきなり、同謂之玄をとく さては深しと云ふも餘りあり、いかで一言に云ひ得つべき、深きが上の深きなり、玄之又玄をとく 天の動て地の靜か、陽の暖か陰の寒き、水の流れ火のもゆる、鳶の飛で魚の躍る、柳は緑花は紅、凡そ天地間に充滿したる萬の物の然る所以は、實に測り知られぬものなり、それこの衆の妙なる物、いづれの處より出づるや、玄之又玄なる道より出づ、そもく道は衆妙の門なり、衆妙之門をとく 汝等衆生未聞乎、是吾所謂道者也、豈非廣大無邊甚深無量者哉、

〔餘論〕漢以來の學者、心は動物、うごきづめのものなりとし、心猿などの語もありて、猿の如く動て止まぬものと云ひ、その靜かなるときあることを云はず、このことや聖人たゞ易に於て述べ玉へり、寂然不動とあるは、靜かなり、感而遂通天下之故とは、動くなり、又中庸に愼其獨とあるは、動く時の工夫なり、戒愼恐懼とあるは、靜かなる時の工夫なり、今老子の書、首として常無欲と云ひ常有欲と云ふ、動靜の二つあることを述べたり、これ學問の大端なり、眼光何のとゞかざる所あらん、

二章

〔章意〕前章に道を明す、此章は聖人その道を體し玉ふ無爲不言の作用を明せるなり、

天下皆知美之爲美。斯惡已。皆知善之爲善。斯不善已。

〔解義〕夫れ表を知て裏を知らず、今を知て後を知らざるは、常

人の習ひなり、天下の人皆美しきは美しきとのみ思へども、これ惡きものなるのみ、善は善とのみ思へども、これ不善なるものなるのみ、（以上本文をとく）たとへば桃櫻、花の錦と打ち詠むるは、これ知美之爲美と云ふものなり、幾程もなく風に誘はれ雨に打たれて塵塚の塵となる、これ惡きものゝみ、善の不善なるも、この理に同じ、

故有無相生。難易相成。長短相形。高下相傾。音聲相和。前後相隨。

〔字訓〕有無相生とは、有は盡きて無となり、無は生じて有となる、萬の物みな然り、これを有と無と相生ずと云ふなり、難易相成とは、たとへば難しとして慎めば易し、易しとして忽にすれば難し、これ難と易と相成るなり、長短相形とは、鶴の脛の長きによりて鳧の脛短く見え、鳧の脛の短きによりて鶴の脛の長く見ゆるは、これ長と短と相形るゝなり、高下相傾とは、よそめたのしきは世の習ひ、山より里を羨むは、高きより下きを傾き慕ふなり、里より山を羨むは、下きより高きを傾き慕ふなり、これを高と下と相傾くと云ふなり、傾とは、うらやみ慕ふ心なり、音聲相和とは、音も聲も同じくこゑなり、聲なれどもとり分け文あるこゑを音と云ふ、但しこれは音聲の二字を並べて分ちをいへば如此、常には差別なし、凡そ文字の解しやう、この類多し、和とはこゑのまじり合ふことなり、音あり聲ありて相まじり合ふを、音と聲と相和すと云ふなり、前後相隨、隨とはつれ立てできる意なり、前あれば後あり、後あれば前あり、これ前と後

と相つれて出來るものなり、

〔解義〕夫れ美ありて惡なく、善ありて不善なき世なりせば、美と云ひ善と云ふも、いかばかりか願はしからんに、いかで此世に然ることのあるべき、（以上發端）この故に有と無と相生じ、有あれば無あり無あれば有あり、難と易と相成りて、易あれば難あり、長と短と相形れ、長きあれば短きあり、高と下と相羨みて、高きあれば下きあり、音と聲と相まじりて、音あれば聲あり、前と後と相隨ふて、前あれば後あるものにて、すべてこの世の物の偏なるはなし、美あれば惡あり善あれば不善あるものなり、然れば好事不如無、

是以聖人處無爲之事。行不言之教。

〔節意〕こゝ一章の眼目なり、上文かず〳〵並べたるは、これを云ふ爲めなり、

〔解義〕夫れこの世の樣をみるに、物の偏なるはなし、こゝを以て聖人は爲す心なくして事をなし、舜の恭已正南面而已もこれなり、言ふ心なくして自ら敎となる、孔子の吾欲無言もこれなり、すべて自よき事仕出さんとばし玉はざるなり、

萬物作焉而不辭。生而不有。爲而不恃。功成而弗居。夫唯弗居。是以不去。

〔字訓〕萬物とは泛き詞なれども、人を主として云ふなり、作とは心に思ひたつなり、生はそのことをなしはじむるなり、爲はいたすなり、成はでき上がりたるなり、作生爲成の四字は、大抵

順に云へるなり、たとへば、草木の冬地中に萌すは作なり、春芽を出すは生なり、夏花咲くは爲なり、秋實のるは成なり、辭はことばを出して云ふことなり、有は我がもの我がことゝすることなり、

〔解義〕さて聖人無爲の事をなし不言の敎をなし玉ふその作用は、凡そ世の人、士農工商、己がさまゞ事をなさんと思ひ作とき、聖人上にまし〳〵て勸めもせず止めもせず、そは皆その意に任せおき玉ふ、これ萬物作焉而不辭なり、それより其事仕始めんとするときに、聖人我がすることゝし玉はざるは、これ生而不有なり、其事いよ〳〵爲し得んとするに、聖人其智を恃みにして手をつけ玉はざるは、これ爲而不恃なり、つひにその功成りたるとき、これ皆汝等の功なり、五穀多きは農の骨折り、財貨富めるは商の働きと、功と云ふ功、みな人の功として、聖人は我が功ならずと外へ引き退き、そのばに居玉はざるは、これ功成而弗居なり、それたゞ引き退きその場に居玉はず、それゆゑにこそ、其功は去りうせずして長く聖人の功となりてありけるなれ、これを夫唯弗居是以不去と云ふなり、以上本文をとく、此章言ふ心は、世に偏なることなければ、功あれば敗あるべし、然るにもし功を己の功なりとせば、敗は誰の敗とすべき、それ故に聖人は人にまかせて己功をなさんとせず、しかしてその功はみな聖人の功となるなり、漢の高祖曰、籌策を帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決することは、吾不如子房、國家を鎭め、百姓を撫で、餽饟を給し、糧道を絶たざることは、吾不如蕭何、百萬の衆を連ね、戰へば必ず勝ち、攻むれば必ず取ることは、吾不如韓信、

此三人者、皆人傑也、吾能用之、此吾所以取天下也と、しかして三人の天下とならず、高祖の天下となる、夫唯弗居、是以不去とは、かゝる例を云ふなり、漢の高祖の如きは、能く此章の意を得たりと云ふべし、班固曰、老子、人君南面之術也と、此章の如き、先づその虚言にあらざるを見るべし、

〔餘論〕すべて凡人は眼光のとゞかざるものにて、雙陸の采に一のうらは六なるを知れども、萬の事にうら有るを知らず、此理や、ひとり聖賢のみ知り玉へり、吾儒の聖人は、周易に於てこれを明せり、乾の反は坤なり、（乾は陽なり、坤は陰なり、）泰の反は否なり、（泰は治世なり、否は亂世なり、）六十四卦みな然り、これ陽あれば陰あり、始めあれば終りあり、必その反あることを示し玉へり、佛經の中、生者必滅、會者定離など云へる語も、みなこのことなるべし、今老子この章に於て首として述ぶる所も、亦このことなり、聖賢の見る所みな同じきなり、但しその場に當り處するみちには差別あり、夫れ治世あれば亂世あるは、天運なり、然れども艱貞无咎、心に難しとし事をたゞしくして人事を盡くせば、天運を引き返し、治世を保ち亂世とはならざるなり、然れば天運を憂へずして人事を盡すべしと敎ふるは、吾儒聖人の敎なり、生者必滅、玉を欺く小野小町の麗しさも、果ては枯野の髑髏なりと悟りて、骸骨の上を粧ふて花見哉と、生ける小町を髑髏の思ひをなして、迷ふ心を萌さゞるは、禪家の敎法なり、今老子の語にも、斯惡已と云へり、斯の字きびしき辭にて、美しきをとりも直さずそのまゝ惡きなりと思へるなり、略禪家の意に同じ、つまり人の美しきに迷ふを諭す爲めの說なり、

三章

〔章意〕此章は聖人無爲の治を施し玉へば、萬民無欲になりて天下靜謐なることを云ふなり、

不尙賢。使民不爭。不貴難得之貨。使民不爲盜。不見可欲。使心不亂。

〔字訓〕賢とは德のすぐれたるを云ふ、能とははたらきの有るを云ふ、もと少し分ちあれども、註には賢猶能也とありて、同じ心にしたるなり、不尙とは、赫々として目だゝしめざるを云ふなり、それ大將の任に堪へたるものは大將とし、抱關の任に堪へたるものは抱關とするは、いづれをにくみ、いづれを嘉すと云ふにあらず、たゞその器に隨てそれ〳〵の位に用ゐるなり、是を不尙と云ふなり、たとへば人の一身は、首在上、手在中、足在下、これ造物者の物ずきにて、首を尙びて上におき、足を賤しみて下におき、手をどちはんつかずとして中ほどにおきたるに非ず、たゞそのあるべき位におきたるなり、聖人の人を用ゐるも如此、それゆゑ不尙と云へるなり、不尙と云へばとて、然らば賤しめんかと云ふものは、聞き下手と云ふものなり、不貴難得之貨とは、中庸の賤貨に同じ、聖賢の云ふ所みな同じ、貨とは金玉の類なり、金玉は山より出で海より升る、故に難得と云ふ、不貴とは、貨を殖さんと强に心を勞せず、貨は世に行はれて人間の用たすまでのものなりと心得たるを、不貴と云ふなり、かの殷の紂王萬民を掠めとりて鹿臺に財を積み、唐の德宗の瓊林

に庫を建て手元金をためられし如きを、貴ぶと云ふなり、さりながら不貴とあるを聞き、然らば土塊の如く看做し、西行法師の鎌倉にて銀猫を門前の子供に與へて去れる如く、心離れてしまふべしと云ふは、餘りに不情になりて、これ亦聞き下手と云ふべし、可欲とは、富貴榮華子女金玉を始めとし、すべて人のほしがるべきものを云ふなり、さすところ廣し、

〔解義〕凡そ人心の欲に動き易きこと、風波の如く、やゝもすれば世は騒がしくなるものにて、實に不可磯ものにぞありける、それ故に上としてこれを治むるには、人の欲心を動かさゞる仕向けをば、上策と云ふべきなり、以上發端、それ愚不肖なるものは用をなさず、賢能にて用は辨ずるものなり、然れども吾それを尙び顯はして赫々目立つに至るときは、凡人の常として己の程を知るものなければ、たゞに人の心を動かし羨ましめ、吾劣らじと爭ふやうになるものなり、以上本文の前をとく、以下本文をとく、如しその賢能なるものは、その器に隨ひ、それ〳〵の位に用ゐるまでにて、とり分け嘉し顯して人の目に曜かさゞれば、人々己が程を顧みその分限に安んじて、爭ふことなからしむべきなり、それ金玉の類は難得ものにして、しかもたからと稱すれば、もと貴きものなれども、吾それを貴び聚めんとするときは、人亦これに視傚ふて、貪り盜むに至るものなり、以上本文の前をとく、以下本文をとく、如しその難得ところの貨それを貴び聚めんとすることなく、たゞ世に行はれ用たすまでのものなりと心得おけば、人亦それなりの物と看做して、貪り盜むことなからしむべきなり、それ世の人の欲しがり望み身に替へ命に換ふるものは、富貴榮華子女金玉を始

めとして、その數その品限りなし、然るに人情の常として、見るに心は動くものなり、（以上本文の前をとく、以下本文をとく、）如しその人のほしがるべき數々は、兎角に人に見せざるやうにすれば、人の心を亂れざらしむべきなり、

是以聖人之治。虛其心。實其腹。弱其志。強其骨。

〔解義〕夫れ人を治むるは、その欲心を動かさゞるを旨とすべし、是を以て聖人の天下國家を治め玉ふの法は、天下の人々心は虛にして、もくろみたくむことなく、しかして腹は飽くまで食して實たしめ、その志は柔弱にして、事を企て興すことなく、しかして筋骨は强壯にして身健かならしめて、露ばかりも餘念なく、たゞ俛して己が生業一とすぢに、男は耕し女は織りて己が世わたる樣をなさしむるなり」、（以上本文をとき了る）後世の如きは、民各有心、胸に思ひの絶ゆることなく、又窮せるも多ければ、食に乏しきも少からず、志强くして身弱きも多きなり、然ればこゝに述ぶる所の上古無爲の治の如きは、實に聖人の世と云ふべし、

常使民無知無欲。使夫知者不敢爲也。

〔解義〕常に天下の人に智もなく欲もなきものならしめ、若し又人多き中、千差萬別、いさゝか機巧の智をもてる者あれども、世間一般無智無欲にして、よき風儀の中なれば、己一人機巧の智を出して事せんことは、敎に憚りてせざるやうにならしむるなり、一同によければ、あしきもそれにつれて自あしきこと

はせざるものなり、

爲無爲則無不治。

〔解義〕夫れかゝる治をば無爲とは云ふなり、無爲をなせば、無不治世はしづかなるものなり」漢の文帝曹參等、清淨無爲を以て天下を治め、天下治まりて、萬民和樂、家國清寧なりしこと、これその證なり、

〔餘論〕今は昔、癡ものゝ、九十九夜、女の許へ通ひしもありと云へり、これ亦見ぬ戀にはあらざるべし、心の亂れそめたるは、定めて見るにあづかるべし、不見に勝ることはあらじと、青面金剛の手にて眼を掩へるも、この意なるべし、吾が聖人大易に於てこれを示し玉へり、艮其背とあるは、見ざる所に心止まり、靜かにして動かざるを云ふなり、治容誨淫、慢藏誨盜とあるは、容を美しく粧ひたるは、人に淫を誨ふるに同じく、寶をみだりに出しおくは、人に盜を誨ふるに同じ、兎角は人のほしがるべきものを見せざるやうにすべしと云へり、聖賢の明、始終を照して事を未然に防ぎ玉ふ深切なる敎なり、昔禪僧をためさんとて美人を以て試みしものあるに、その僧寂然として動かずして曰、枯木倚寒巖、三冬無暖氣と、如此は見ると云へども猶不見、心の動くことあらじ、然れどもこは高德の上のことなり、富貴榮華美女金玉を始めとして、人の目につくもの、見るに心の動くこと、常人皆然るべし、

四章

〔章意〕 此章は聖人無を身に體し玉ふ妙用の測られざることを云ふなり、

道冲而用之。或不盈。淵兮似萬物之宗。

〔字訓〕 冲とは虛なり、卽ち無のことなり、用之とは無の道を用ゐるなり、不盈とは虛なることなり、淵兮とはふかき貌なり、宗とは首と云ふ意なり、似とはきめていはれざるなり、聖人は無爲の事をなし玉ふ故に、見んとするに形なし、不言の敎を行ひ玉ふ故に、聞かんとするに聲なし、形もなく聲もなく、爾と認むることを得べからず、それ故にこれ如此なるものなりと取り極めて云ふべからず、因てたゞ似たり〳〵と云ふなり、

〔解義〕 夫れ聖人は無を身に體し玉へば、聲もなく形もなし、そのやういかんと窺ひ知ることを得べからず、今且つその似たる所を云はん、（以上本文の前一層、以下本文、）それ道は無なるものなり、聖人なる者、亦その心冲しく無にしてその道を用ゐ、或は盈ちて心の實するとは云ふことなく、いよ〳〵その無をつらぬけるものにて、その人となり、おく深く窺ひ知ることを得べからず、これぞ萬物の宗ならんと見ゆるのみ、

挫其銳。解其紛。和其光。同其塵。湛兮似或存。

〔字訓〕 挫其銳とは、人のするどなるをくじくなり、銳とはもと兵刃のさきなどを云ふ、今こゝには人の猛烈なるを云ふなり、解其紛とは、事のもつれてむづかしきをさらりと解きすますなり、紛とはもと絲の亂れたるを云ふなり、和其光とは、己が光

りを和げて目立たぬものになることなり」、同其塵とは、己みぐるしき仕方を人と同じやうにすることなり、塵とは、よごれてみぐるしきことを云ふなり、惡と云ふにはあらず、論語に辱其身などある、この意なり」、湛兮とは、しづかなることなり、躁がしくせずして只しづまりかへつてをる貌、已いかめしくせざる體を云ふなり、似或存は、其人のそこに在せども目立たざる故に、只在すかと見ゆるまでなり、

〔解義〕　夫れ人の世に處るは、心にかなへるを順境と云ひ、心にかなはざるを逆境と云ふ、莊子の注に、相靡相刃と云ふはこれなり、然るに人も鋭く吾も鋭き時は、ともに刃の上をゆき、危き逆境を履み渉るなり、（本文前一層、以下本文、）聖人なるものは、人鋭き時は、吾は虚にして校あはず、只それなりに受け流し玉ふなり、それ故にさしも鋭きものも、吾に向て爲すべきやうなく、風を衝き雲を打つが如くにて、如何ともすることを得ず、これを挫其鋭と云ふなり」、夫れ事の紛れてむづかしきを、手暴く急にこれを治めんとすれば、彌もつるゝものなり、（以上本文の前一層、以下本文、）聖人なるものは、虚を體し靜かにこれを處置し玉ふなり、それ故に事もつれたる時、其手をぬらさずして治まるなり、これを解其紛と云ふなり」、夫れ衆人は愚不肖なるものなり、若し己獨その智を耀かし光りを露はせば、衆人を皆くらきものとするなり、然れば天下衆人のにくみを招くなり、（以上本文の前一層、以下本文、）聖人なるものは、聰明睿智、光りは餘りありながら、その光りを露はし玉はず、打ち和げて　立たざるやうになし玉ふなり、これを和其光と云ふなり」、（孔子のことを東家丘と云へるものある由、これ聖智を露はし玉はざるにもよるべし、）それ衆人の愚不肖なる、塵の

如くよごれ濁りたるものなり、（佛經に五濁惡世と云ふも、これなるべし、）若し己一人清きものとなり、別なるものとならば、天下衆人に擯けられ、天地の間に立つことを得ざるべし、（以上本文の前一層、以下本文、）聖人なるものは、己一人清きものとならんとし玉はず、塵の如くよごれたる所を衆人と同じやうにし玉ふなり、これを同其塵と云ふなり」、この四つの者、虛無の妙用なり、かるが故に聖人の世に在すは、湛然しづかにして躁がしからず、在せども目立たずして、或は存するかと見ゆるばかりなり、

吾不知誰之子。象帝之先。

〔字訓〕誰之子とは、如何なる人と云ふに同じ、たれのせがれと云ふことにあらず、象は似たるなり、象帝之先とは、天にも勝れる人の樣なりと云へるなり、帝とは天のことなり、

〔解義〕かゝる妙用ある人は、その樣測り知るべからず、吾いかなる人なるを知らず、これと名づけ云ふべきなし、これぞ天にも勝る人なるべしと見ゆるなり、夫れ天はその大ならぶものなし、然れども萬物を覆ふのみ、今この聖人は、無を體してかゝる妙用を具へ玉ふ、豈天に勝るにあらずや、

〔餘論〕挫其銳、俗に云へる柳の枝に雪折れなしと、この意なり、昔劉伶、或人これを怒りて、打たんとして、拳を奮ひ來りければ、劉伶曰、雞肋不足安尊拳と、その人笑て止む、漢の吳王濞、偃蹇謀反、稱病不朝、文帝これに几杖を賜ひ慰なりければ、文帝の世を終るまで反すること能はず、この類これなり」、解其紛とは、世にむづかしきことを手づよく處置し、理に當るとも、人心折り合

はず、却て變を激して後患を生ずることあり、易に曰夬夬貞厲とは是れなり、

五章

〔章意〕 此章は、聖人無心の用を述べたるなり、

天地不仁。以萬物爲芻狗。

〔字訓〕 芻狗とは、芻にて狗を作り、祭の時に用ゐ、祭過ぐればそれなりに棄て置くものなり、今こゝに引くは、意を加へずあるべきまゝそれなりのものとするの意にとるなり、

〔解義〕 夫れ天地は無心なるものにて、仁愛をかけんとするの意もなく、萬物を祭のときの芻狗の如く、それなりの物として、其自然に任せ置き玉ふなり、而して柳は緑花は紅、萬物己がさまぐに生ひ立つは、これ道の用にして、卽ち天地のめぐみなり、

聖人不仁。以百姓爲芻狗。

〔解義〕 聖人も無心なるものにて、仁愛をかけんとするの意もなく、百姓を祭のときの芻狗の如く、それなりの物として、其自然にまかせおき玉ふなり、而して井を鑿り田を耕し、百姓己がさまぐにすぎゆくは、これ道の用にして、卽ち聖人のめぐみなり、孟子に王者之民、皡々如也とあり、そは聖人とり分け愛を施して人を悅ばしめんとし玉はずして、その民自ら生を遂げ、聖人のめぐみの中にありながら、其めぐみなるを不知不覺も

のなりと云ふことにて、此節の意と略同じ、

天地之間。其猶橐籥乎。虛而不屈。動而愈出。

〔字訓〕橐籥は鍛冶屋の用ゐるふいごのことなり、屈は盡くることなり、不屈とは盡きざるなり、

〔解義〕聖人は無心なるものなり、天地の間に於てそれ猶橐籥のごとくなるか、それ橐籥は、その中虛にして風の出づることは盡くるなく、動けば動くに隨て、いよ〳〵風の出づるものなり、以上本文をとく聖人亦此の如くにして、其用盡くることなく、事あれば事あるに隨て、いよ〳〵その用は出づるものなり、「二本めは與市もこまる扇かな尾張野有翁俳句」と云へるが如きは、名人なれども用の盡くることあり、聖人は萬事を處置し玉ふに、用の窮くることなきなり、

多言數窮。不如守中。

〔節意〕こゝ多言の害を以て、多事の害を明すなり、河上公の註に、多言害身、多事害神と云へるあり、名言なり、

〔字訓〕數窮、諸說はしば〳〵窮すと解す、王註は數は理と看做す、數と理のこと、易に於ては判然差別あれども、つねには同じやうに用ゐること多し、中は空なる所を云ふ、卽ち虛のことなり、無心のことなり、

〔解義〕夫れ多言なるものは、道理に於て必ず窮ることのあるべきはずなり、虛を守りて言はざるにしくはなし、以上本文をとく事をするも亦然り、多事なれば、道理に於て必ず窮することのある

べきはずなり、虛にして無爲なるにしくはなし、夫故に聖人は、橐籥の如く、その心虛なるものなり、無心なるものなり、

六章

〔章意〕 此章は道體を述べたるなり、程子曰、谷神一章、尤佳、朱子曰、至妙之理、有生々之意存焉、この章頗る深きことなる由、林註に修養家の本づく所なりと云へり、修養家は養生仙術など云ふ說にて、後世盛んに行はるゝ一派なり、

谷神不死。是謂玄牝。

〔字訓〕 谷神不死一句、前章の虛而不屈と、その意全く同じ、たゞ辭を換へたるのみ、谷は虛なるものなり、故に道の虛なるを譬へて谷と云ふなり、神とは測られず不可思議なるを云ふなり、虛をほめて云へるなり、不死とは、つきざるなり、凡そ實せるものは、生もあり死もあり、虛なるは、生と云ふもなければ死と云ふもなきなり、故に不死と云ふ、佛家に不生不滅など云へるも、虛を云ふなるべし、玄はおくふかきなり、牝はしづかなるを云ふなり、牝の字、諸註は物を生ずるの意とす、王弼の註は、しづかと云ふの意にとる、牡はさわがしく牝はしづかなるもの故なり、

〔解義〕 そも〳〵道と云ふものは、その形なく虛にして、そのはたらき不可思議なるものなり、この谷神の二字をとく、しかもそのつくると云ふことなきものなり、この不死の字をとく、この道やげにおく深くしづかなるものなり、故にこれを玄牝と云ふなり、

玄牝之門。是謂天地根。

〔字訓〕之門の二字、かるく見るべし、たゞ韻を協はせる爲め帶けて云へるまでなり、（老子の語、いづれも韻をふめり、）門とは物の出づるところなり、

〔解義〕道のおく深くして靜かなるところは、萬物の出づる處なり、（この玄牝之門をとく、）天地もこの中より出づるなり、故に是を天地の根と云ふなり、

綿綿若存。用之不勤。

〔字訓〕綿綿は不絶貌なり、若とはとりきめて云ひ兼たる詞なり、道と云ふもの、存りと云はんとすれば、その形見えざれば、存りと定めがたし、亡しと云はんとすれば、萬物この道によりて成れば、亡しと定めがたし、故にたゞ若存と云ふなり、勤は勞るなり、不勤とは、つかるゝことなく、つくることなきなり、

〔解義〕道は古より今に至るまで綿々として絶ゆることなく、有れどもありと定めがたく、たゞ若存に見ゆるものなり、然れども萬物この道の庇によりて成就し、この道を用ゐるに、つかれ盡くると云ふことなきものなり、

〔餘論〕王弼の註に、谷神とは、谷中央無谷也とあり、面白き註なり、夫れ谷と云ふもの、兩傍は岸なり、下は底なり、谷と云ふ谷はいかなるものなりと尋ぬれば、谷たる形なし、たゞ中央の虛なる處のみ、故に虛を譬へて谷と云へるなり、神とは不可思議なるを云ふなり、虛をほめたる詞なり、何故に虛を神とほむるな

れば、只虚なるものは、思ひ議るべからざる所あり、萬物を生ずるも虚なり、萬物をいるゝも虚なり、今其一端を擧ぐれば、鏡の中は虚なり、故によく影を寫し、鼓の中は虚なり、故によく聲を發す、實せるものにはこの測られざる用なし、故に虚をほめて神と云ふなり、佛家にも、虚空の物を容るゝを、不可思議と云へるよし、その意或は近からんか」、或問て曰、老莊の書、毎に虚を貴ぶことを述ぶ、其虚と云ふことといかん、答て曰、虚は實の反對なり、凡人の閑思雜慮にて、胸に思ひの絶ゆることなき、これ實と云ふものなり、さなくして虚靈不昧なるを虚と云ふなり、莊子に曰、至人之用心若鏡、不將不迎、應而不藏、これ虚と云ふものなり、不將とは、事すぐれば其事心にのこらざるなり、不迎とは、未だなき事をとりこして心になやむことなきなり、將り迎へるば、心その事に累はさる、鏡にくもりある如きなり、虚にあらずくもりある心にて處置すれば、必ず事を誤るなり、故に虚を貴ぶなり、易に所謂敬以直内もこのことなり、源敬公心常ならざる時、法官謁を乞ふあれば、音曲など聞き、心常に復せる上、逢ひ玉ひし由、或時の語に、心常と異なるとき指圖すれば差ふものなりと、又板倉伊賀守、訟をきくに障子越しにて聽けりと云ふ、訴訟人を眼にみるときは、心くるふことある故なりと、これみな心くもりありて差ひ謬ることあるを慮れるなり、よく心を用ゐられたりと云ふべし、

七章

〔章意〕 此章は、聖人無心にして私なきを云ふなり、

天長地久。天地所以能長且久者。以其不自生。故能長生、

長生、碑本作長久、

〔解義〕天のつくるためしなく、地のつくるためしなし、天地は長久にして疆り知られぬものなり、そも〳〵天地のよく長久なる所以は、天も無心地も無心なるものにして、己長くながらへんとするの意なし、夫故に天地ともにおのづからよく長久なるものなり、

是以聖人後其身。而身先。外其身。而身存。非以其無私耶。故能成其私。

〔字訓〕私とは、己一分のことを云ふなり、邪曲のことにあらず、

〔解義〕是を以て聖人も無心にして、其身を後にし先だゝんとはし玉はざれども、つひには其身先となり玉ひ、其身を外けて存せんとはし玉はざれども、つひには其身存し玉ふなり、夫れ聖人は其身一分を思ふ意なきを以てにあらずや、夫故によく其身一分のこと成就するものなり、

〔餘論〕人皆先だゝんとし、我亦先だゝんとすれば、人は千萬人、我は一人なり、先だつことを得べからず、人皆先だゝんとするとき、我先だゝんとする心なく、後となりて在るときは、衆人にたち越えたるなり、衆人にたち越えたるは、衆人推し尊ぶ所なり、故につひには先となるなり」、然れどもこれたゞ衆人の爭ふて止まざるより、よぎなく其效を示して喩せるなり、佛家に云へる方便なり、もしこれを人に先だつ術を敎へたるにて姦智

なりと云はゞ、とり様のあしきと云ふものなり、

八章

〔章意〕此章は、聖人は爭ふなし、故に人より禍を招くことなきを云ふなり、

上善若水。水善利萬物而不爭。處衆人之所惡。故幾於道。

〔字訓〕不爭とは、高きに居らんとせずして卑きに居り、順に流れて逆はざるを云ふなり、利とは爲めをすることなり、

〔解義〕惡に大小あり、善に上下あり、惡の小なるは忽にすべからず、善の上なるは貴ぶべし、それ善の上なるは譬へば水の如くなり、（以上上善若水をとく）そもく水は、天に在ては雨露となり、地に在ては谷川となり、萬の物を潤澤しつゝ生育するものにして、よく萬物を利するものなり、（以上水善利萬物をとく）然るに其功にほこらずして高きをさけて卑きに居り、順に流れて逆ふことなし、（以上而不爭をとく）夫れ卑きはみな人のにくみ嫌ふ所なるを、水はその卑きに居るものなり、（以上處衆人之所惡をとく）つらく物の樣をみるに、火の炎上する、道に似ず、木の强き、道に似ず、金の堅き、道に似ず、萬の物の中に於て、たゞ水のみぞ道に近きものなる、上善の樣も亦如此、（以上幾於道をとく）水は上善にたとふれども、猶形あり、道は無にして形なし、全く同じとは云ふべからず、故にたゞ幾於道と云ふ、同於道とは云はざるなり、

居善地。心善淵。與善仁。言善信。正善治。事善能。動善時。

〔節意〕此一節は、水の德を述べたり、

〔字訓〕居善地、居は水のをるを云ふなり、地はその居りばなり、くぼみに水たまる、卑きところをさして云ふなり、心善淵、心とは水の性をさして云ふ、水のもちまへを云ふなり、淵とはふかくしづかなるを云ふなり、與善仁、與とは水の潤澤を萬物に施し與ふるを云ふなり、仁とは水のめぐみなり、物の生育は、水の惠みなり、それを仁と云へるなり、言善信、水は言はざれども、影を寫し顯す所をさして言と云へるなり、信はたがはずうそのなきことを云へり、正善治、正は政と通用す、一本に政に作る、輕く借り用ゐて水の所爲をさして政と云へるなり、治は惡を去り善を全うするの義なり、治疾治國など皆同じ、水にとりては汚れを洗ひ去り、もとの如く綺麗なるものにするを治と云へるなり、事善能、事はしわざなり、能ははたらきなり、七德の說、河上公等に從ひ、みな水のことして解す、

〔解義〕そも〳〵水の德たる、姑く之を擧げ云はんに、夫れ水の高きをさけて卑きに居り、たとひもとの雫末の露となりては、しばらく高きにありと見ゆるも、高きには止まらず、終には卑きに落ち來り、岩をつたひ落葉をくゞり、必ず卑きに至らざれば止まざるものなり、物の居りばゝ卑きぞよき、卑きは危きことなく、よきをりばなり、これ水の居善地と云ひつべし、又水と云ふものも、時としては風に波立ち岩にくだけて、その音耳に聽くもあるはあれども、そはもと水の本體ならず、水の本體の性は、必ず深く靜かなるものなり、これ水の心善淵と云ひつべし、又其潤澤を萬物に施し與へて、萬の物ひとしく其めぐみ

をうけて生育す、紫宸殿の櫻より賤が伏屋の草までも、洩るゝくまなく風にかをらぬ花ぞなきは、まさに知るべし、これ水の與善仁と云ひつべし、又彼の柳樽に、正直な鏡に下女は腹を立て、水も亦これにひとし、色の黑きを白くもせず、鼻の低きを昂くもせず、美も醜も、增さず減さず、其まゝにいつはりなく寫し顯すは、これ水の言善信と云ひつべし、又いかに汚れ穢れたるその物も、一度水にいれすゝげば、惡は去りて善は全く、淸らかなるものとなる、これ水の政善治と云ひつべし、又水は方圓の器に隨ふとありて、方なるものに入るれば方となり、圓なるものに入るれば圓となる、これ水の事善能と云ひつべし、又水のけしき、冬寒ければ凝りて止まり、春暖かなれば解けて流れ、その時々に隨ふは、これ水の動善時と云ひつべし、

夫唯不爭。故無尤。

〔解義〕凡そほこり高ぶれば、禍を招くものなり、然るに今水は、上にかず〳〵述ぶる如く、くさ〳〵の德を具へながら、高きをさけて卑きに居り、順に流れてさからはず、夫故にこそ外よりとがめにくむものなく安らかなるものなれ、上に云へる上善も、亦かくの如し、

〔餘論〕さしもに廣き街衢、所狹きまで馬車、此に湊ひかしこに奔るはいかならん、名を爭ひ利を爭ひ、互に爭ひ爭ふは、世渉るさまとは云ひながら、あさましと云もおろかなり、兼好法師の紛るゝ方なく只獨あるのみぞよきと云へるも、かゝる類を厭へるならん、今此章は專ら爭を戒められたり、儒門には君子無

所爭と敎へ、佛家にも不諍とやらん云へる由、そも〳〵其害を案ずれば、爭ふは小人なり凡夫なり、不爭は君子なり聖者なり、爭ふは躁がしきなり亂世なり、不爭は靜かなり治世なり、人の善惡、世の治亂、その本は皆こゝにあり、三敎一致、みな爭を戒めらる、實にその理あることなり、兼好法師、善にほこらず物と爭はざるを德とすと云へるは、簡にして盡くせりと云ふべし、

九章

〔章意〕此章は、凡そ人の行末安全なるべき道を示す、

持而盈之。不如其已。揣而銳之。不可長保。

〔節意〕亢ぶるものは危く、銳きものは折るゝを云ふなり、

〔字訓〕持とは德を持ち居り、德ありげに顯すことなり、盈とはその德のみち餘る體をするなり、揣は治むるなり、才智を磋り磨くなり、銳とはするどきなり、

〔解義〕夫れ人の世に立ち交はる、誰かその身の安全を願はざらん、然るに安きもの少く、全きもの稀なるは、大方は世に亢ぶり銳くして、その道を失へばなり、（以上發端）されば凡そ人の德ある者は、德なきが如く、才あるものは、才なきが如くひかへめなるべきに、世の人其德を持ち顯して、猶其上にいよ〳〵盈ちて餘りある如くにして亢ぶりたるは、人に惡み疎まれて、その身必ず危きものなり、（こゝ持而盈之の一句をとく）その德はその身の益となりてこそあらまほしけれ、かへつて其身の害となるはその已めて德なきにしかざるなり、（こゝ不如其已の一句をとく）凡そ人の才智をすりみがきて、猶

其上にいよ〳〵するどくさがしくなしたるは、人に忌みいとはれて、其身長く保つべからざるものなり、（こゝ揣而鋭之不可長保の二句をとく、）

金玉滿堂。莫之能守。富貴而驕。自遺其咎。

〔解義〕つら〳〵世を觀ずるに、亢ぶるものは危く、鋭きものは折るゝ習ひにて、世の寶なる金玉、多く積みたくはへて家に滿つるも、これをよく守り保つことなく、富貴にして人に仰がるるも、驕り恣なれば、みづから其身に禍を與ふるなり、豈傷ましきことに非ずや、

功遂身退。天之道。

〔字訓〕天之道とは、姑く四時の運に就てこれをみれば、春は萬物を生ずることを司る、百の卉草も萌え出でゝ生ずるの功成るときは、春は退て夏となる、夏は萬物を長ずることを司る、すでに長ずるの功成れば、夏は退て秋となる、秋は實のるを司る、すでに實のるの功成れば、秋は退て冬となる、冬は藏むるを司る、すでに藏むるの功成るときは、冬は退て春となる、これ功成るものは退くなり、

〔解義〕そも〳〵人の金玉の堂に滿つるを保ち、富貴にして禍に逢ふことなく、安く全かるべき道なからんや、（以上發端、）功成りて身退くは、天の道なり、天の道にかなへるものは、全かるべき道なり、

〔餘論〕功成身退、天之道、これ千古の格言なり、然るに古今これをよく心得たる人稀なり、古に在ては、越の范蠡、漢の張良のみ、

よく此教にかなへり、近世に就て考ふれば、寛政の頃、白河侯の執權たるや、その臣下強ひて勸めて早く退かしめたる由、これその終りを全うし、今に至るまで賢相と稱する所以なり、近頃或閣老の如きも、日光詣の後、速かに職を辭し退かれなば全かるべきを、一敗塗地、その改め更へられし中に、善きとみゆることまでも、ひとしく消え盡くるやうになりたるは、惜しきことなり、たゞ先哲の金言を知らざるによる、臣下なきに非ず、これ誰の愆ちぞや、

十二十二

老子講義卷二

牧山佐藤先生著
市野靖
大久保誠知同校

十章

〔章意〕この章は、よろづ自然にまかすべきことを示せるなり、

載營魄抱一。能無離乎。

〔字訓〕載は註に猶處也とありて、心の外へちらず、そこにすわりてをることなり、營魄は形魄なり、營は運動なり、かたちは運動するもの故に營魄と云、抱は守なり、一とは天性を云なり、萬

物の天性は、みなそれ〴〵に一ッづゝうけ得てをるものなり、梅の天性は酸く、砂糖の天性は甘し、鳥の天性は飛び、魚の天性は游ぐ、人にて云はゞ、射を天性に得たるもあり、御を天性に得たるもあり、其外すべて此類なり、故に天性のことを一と云へるなり、能乎とは、できがたきこと故に、問ひかけて云へる詞なり、

〔解義〕　夫れ人の一身の主は、心なり、然るに花といへば花に心うつり、月といへば月に心うつり、かにかくに物につれ事に隨て、外に馳せ出で易きものは、人心也、（以上本文の前一層をとく、）然るに其心、物につれ事に隨て外にうつりゆくことなく、我腔子裏（この三字、醫魂にかゝるの二字をとく、）に泰然としてしづまり在て、（本文の鐵の字をとく、）その天性を守り、能く天性を離るゝことなからんか、（以上本文をとき了、）たとへば天性射を能するものゝ射をすて御をせんとするが如きを、天性を離ると云なり、

專氣致柔。能嬰兒乎。

〔字訓〕　專氣は、註に任自然之氣とあり、手の持つ、足の行く、目の視る、耳の聽く、これみな自然の氣のはたらきなり、專氣とは、自然の理に任するなり、さて氣と理と數との三つ、周易に於ては判然と分けてあり、陰の寒く陽の暑きは氣なり、陰の柔か陽の剛きは理なり、陰の數は偶、陽の數は奇なるは數なり、もと三つわけになるものなり、然れどもつねには通じて用ゐること多し、こゝの專氣とは、理をさして云なり、

〔解義〕　夫知也無涯ともありて、とかくに欲は涯りなきものなり、耳目手足のはたらきは、涯りあるものなり、無涯の知のために、有涯耳目手足にむりをすること多く、其身に稱はざること

を企て望みて、つひには身を害するにも至るものなり、（以上本文の前一層をとく、）然るにすべて吾身の運動は、みなその自然のなりにまかせ、身に稱はざることを強ひてなさんとすることなく、強ひて重きを持たんとし、遠きを行かんとし、不見を視んとし、不聞を聽かんとするなく、（こゝ專氣の二字をとく）柔を致めむりをすることなく、（致柔の二字をとく）能く嬰兒の如くならんか、

滌除玄覽。能無疵乎。

〔字訓〕滌除は、すゝぎのぞくなり、玄覽は、ふかく道理をみしるなり、

〔解義〕すべて不正ものゝ目を悅ばしめ、人を惑はし、明を昏ますものは、皆邪飾なり、多くは邪飾に眼をくらまし、道理を失ふものなり、（以上本文の前一層をとく、）然るにその惑ふべき邪飾を滌ぎ除きて、目に觸れず、心の迷はさるゝことなく、ふかく道理を覽て疵なからんか、（以上本文をとき了）吳王夫差の、敵國越王勾踐の獻ぜし美人西施に惑ひ、又吳の大夫伯嚭の、勾踐の賄賂に迷ひてその和議をとりなせし如きは、邪飾に明をくらまされて、玄覽することのならざるなり、

愛民治國。能無知乎。

〔解義〕夫智者は、己が術に任せて、平地に波を起し、己功をなさんとし、數を運して匿れたるを索し、己明なるふりせんとして、中々國の害となるものなり、（以上本文の前一層をとく、その說、註に本づく、）然るにもし民をいたはり國を治め、能く己が智を出さゞることのなるべきか、

以上本文をとき了書經に、勿爲聰明亂舊章、その意ほゞ同じ、

天門開闔。能爲雌乎。

〔字訓〕萬物天より出づ、故に天門と云、易に天地閉づと云へるは、亂世のことなり、考へ合はすべし、天門開けば世治まり、天門閉づれば世亂る、天門開闔とは、世の治亂騒がしき時を云なり、雌は物の先とならず、後につき隨ふものなり、その意にとりて云、老子に多く用ゐる字なり、

〔解義〕夫れ天門開けば世治まり、天門閉づれば世亂る、今や世治まらんとし亂れんとしてさわがしき時に當りて、天下の先だちとなり、雄威を奮ふものは危し、能く雌の如くなりて、人のあとにつき隨て、天下の先となることとなからんか、以上本文をとき了漢の王陵の母の教、この意に稱へり、秦末の亂世に當りて、兵を起ししものども、王陵を推し立てゝ大將とす、その時王陵の母の目立つものとなりてあるときは、事敗れたるとき、身の隱しやうなし、誰かよき人の手につき、目立つものとなるなかれと云へり、於是王陵、漢の高祖に從ひ、しば〳〵戰功ありて、つひに封侯を得たり、

明白四達。能無爲乎。

〔字訓〕達はとほるなり、白も明なり、

〔解義〕夫れ智あるもの、必手を下すことを好み、つひになし損するものなり、空中樓閣、八窓玲瓏、その智明白四もに達りてつかへなくして、しかもその智を用ゐず、能く無爲ならんか、

生之畜之。

〔字訓〕畜はやしなひそだつるなり、

〔解義〕かゝる聖人は、よく萬物を生じ、萬物を畜ひたて玉ふなり、以上本文をとき了、姑く百菓に就てこれをみれば、春は花さき、夏はそだち、秋は實のりて、酸き甘き、その樣々になり得るは、これその自然なるものなり、我より手を添へ妨げをせざれば、花咲くものは花咲き、實のるものは實のる、これ生之畜之と云ものなり、

生而不有。爲而不恃。長而不宰。是謂玄德。

〔字訓〕不有とは、功ありとせざるなり、不恃は、吾が智をたのみにして手を添へることなきなり、宰はきりもりするなり、

〔解義〕夫れ萬物萬事、みな自然のあるものなり、生ずるも自然なり、爲すも自然なり、長じそだつも自然なり、今聖人は、萬その自然に任せて、萬物の生ずるや、吾功ありとせず、そのことを爲し來るも、吾が智をたのみにして手を添へることなく、その長ずるや、吾よりきりもりせず、麻の直きを曲げんとせず、蓬のはへるを直くせんとせず、その天性自然のまゝならしむるなり、これを玄德と名づくるなり、

〔餘論〕註の中に、營魄は人の常居處也とあり、これは分りがたき註解なり、營魄は、人の體なり、言こゝろは、此からだは人の心の常の居處なりと云なり、莊子に人のからだを旦宅日新といひ、又は逆旅と云も、その意同じ、これは我と形とを二つに分けてとき得たるなり、その我と云は、今云へる魂のことなり、そも

そも我といへるものは、靈々昭々なるものにて、千古萬古、滅えもせず、亡びもせぬものなり、（こゝ、老莊の說如此、巳陽明等の說も如此、佛家の書をみるに、佛說も亦如此よし、）これぞ我と云へるものなる、又この形は、天地間陰陽五行（木火土金水）の氣の集りてできたるものにて、（佛家には、地水火風空と云へる由、五重の塔は、この五つに準ふと云へり、）引きよせて結べば柴の庵かなとくれればもとの野原なりけり、この形は、かりのもの、我にあらず、我と云べきは、我心一つなり、今註に常居處と云へるは、この形は人の心のつねに在すべきをりばなりと云の意にて、常居處と云なり、又莊子に、且宅の日新と云は、この形は、我の宅なれども、さてその宅は、いつも同じすがたのものにあらず、幼なるは日々にそだちて、知らず覺えず壯となり、壯なるは日々に衰へて、いつのまにかはもとゞりに霜おく老の白髮となる、これこの形は、朝な〳〵改まりかはる宅の如しと云意にて、且宅と云、又かはり〳〵て今日の形は昨日の形にあらずと云意にて、日新と云へり、又莊子に、形を逆旅なりと云は、人間五十年乃至百年、しばしの間のかりの宿と云意なり、一休和尚の歌なるよし、過去世から未來へとほる一とやすみ雨ふらばふれ風ふかばふけも、この意なるべし、或問て曰、この形は、太極の理と陰陽五行の氣と妙合して成ると云までは、儒門にても云なり、猶その上に、かりの世かりの形にて居處なり且宅なり逆旅なりなど云は、この形をよそげなものと看做したること、儒門には云はざる語なり、なんの爲めに必かくの如く云はんとするや、答て曰、凡そ人の欲を起し咎を作るそのもとは、みなこの世この形に付てのことなり、夫故に老莊の說、每々かくの如く諭し、欲の源を塞ぎ、咎の根を絕つなるべし、

十一章

〔章意〕 道は形なきものなり、故に無と稱すること毎々出づ、この章には、その無の用に立つことをのぶるなり、

三十輻共一轂。當其無有車之用。

〔字訓〕 この無の字は、こしきの孔の空虛なる處をさして云なり、

〔解義〕 三十本の輻、同じく一の轂に貫き穿ちて車を作る、その轂の孔空しき故に、軸をさし貫きて車を行すことを得て、車の用をなすなり、

埏埴以爲器。當其無有器之用。

〔字訓〕 この無の字は、器物の中の空なる處をさして云なり、

〔解義〕 埴を埏合はせて陶器を作る、その器物の中の空虛なるによりて、物を入れ器物の用をなすことなり、

鑿戶牖以爲室。當其無有室之用。

〔字訓〕 この無の字は、室の中の空なる處をさして云なり、

〔解義〕 戶口を開け窓牖を鑿ちて家室を作る、その家室の中空虛なるによりて、人もすみ家室の用をなすことなり、

故有之以爲利。無之以爲用。

〔字訓〕有は形ある物をすべて稱す、ひろく物をさして云なり、利もはたらき、用もはたらきと譯す、

〔解義〕夫れ有用の用は、人みなこれを知る、無用の用と云こと、知るものなし、（以上本文の前一層をとく、）然れども今上件の如き故に、有のはたらきをなすは、みな無の用だつ處から、はたらきをすること なり、吾所謂無の貴きを知るべきなり、

十二章

〔章意〕この章は、聖人世に處するのことをあげて規則となせるなり、

五色令人目盲。（ナレテ、メクラ）

〔字訓〕五色は、青黃赤白黑なり、こゝにはたゞその美しきを云なり、

〔解義〕うら〳〵と花の下に日を暮すも、美（クハ）しき色にひかるゝなれども、興ありて憎（ニク）からず、かの新田左中將義貞公、解語（ヒイラ）の花に惑ひ玉へる如きは、盲（メシヒ）たりとも云べくして、心憂（ウサ）ことなり、天皇も天皇なり、賜はるものにことをかき、美人（勾當内侍）を戰功の恩賞にとはなにごとなりや、この時足利尊氏、都をにげ出で、九州さして落ちゆけり、此機に乘じて、はげしく追ひ擊ちせば、逆賊盡（ツクシ）打ち滅しつべき危急の秋にて、楠廷尉もしば〳〵諫めすゝめらるれども、さすがの義貞公も、かの美（クハ）しきに心ひかれ、今（ケフ）日も出陣せず、明日（アス）も出陣せず、手のびになれるその内に、尊氏紫海九州の兵をかたらひ、再たび勢盛んになり、大軍をひきまと

ひ、水陸ひとしく都をさして攻め上ぼることゝはなりにけり、（以上發端、以下本文を說く、）實に美しき色は、人をして眼昏（クラ）みて盲人の如くならしむるものなり、ゆめ〳〵心ゆるすべからず、（以上本文をとき了る、）むかし晉の文公は、美人南威を得て政に怠り、三日外朝へ出でられざりしに、忽ち自らこゝろづき、それより南威を遠ざけらる、つぶれたる目の三日めにあきたるは、さすがに覇主の器量なり、

五音令人耳聾（チシテ）。（ミヽシヒヽヅンボ）

〔字訓〕五音は、宮商角徵羽なり、こゝにはたゞそのおもしろきものゝことを云なり、

〔解義〕世にいみじき人の管絃（フエヨヒ）に耽り、賤夫（シヅノヲノコ）の小歌淨瑠璃に身をやつし、その是非の分ちを知らざるに至るにても、その樣は知るべきことなり、（以上發端、以下本文を說く、）すべて面白き音聲（オンジヤウ）は、人をして耳惑ふて聾人の如くならしむるなり、

五味令人口爽（チノ　タガハ）。

〔字義〕五味は、鹹酸甘苦辛（シホナラシ　スシ　アマシ　ニガシ　カラシ）なり、こゝにはたゞその美味のことを云なり、

〔解義〕蜀山人（太田直次郎、寛政頃の人、）の狂歌に、世の中は酒と女がかたきなりどうぞかたきにめぐり逢ひたい、とやら詠ぜるよし、酒色には惑ひ易く、惑へば身の仇としりつゝも、猶そのやみがたき如此、ましてやその心づかざるは、（以上發端、以下本文を說く、）すべて酒食の美味なるは、人をして慾動てその口をして爽（タガ）はしめて、可否の分ちもなからしむるなり、

馳騁田獵。令人心發狂。

〔字訓〕馳騁は、馬車にてかけるなり、田獵は、禽獸をかりとるなり、

〔解義〕すぎし嘉永のころなりや、閣老大臣多く遠馬をせられける、その頃の諺に、あぶないものは、淺草の輕業と年寄衆の遠馬とか云へるあり、これぞ馳騁のことなるべし、又大にしては、右大將賴朝公の富士のまき狩より、小にしては、學童の習ふ今川帖に云へる好鵜鷹逍遙とあるも、みな田獵のことなるべし、（以上發端、以下本文へ說き入る、）野に山に、此彼と馬車もて馳せまはり、とりけものを狩りし荒み盤むは、人の心を散亂して發狂せる如くしづかならざらしむるなり、

難得之貨。令人行妨。

〔解義〕むかし漢の楊震へ王密舊恩ありとて金五十斤を贈りければ、楊震これを卻けて受けず、王密の曰、暮夜無知者、楊震曰、天知地知、我知子知、何曰無知乎、かゝる潔白の行なるもの、世に稀にして、古往今來貨賂の爲めに官を失ひ、贓罪に因て身を亡ぼす、そのためしすくなからず、（以上發端、以下本文へ說き入る、）實に難得の貨は、人をして貪り求めてその行を壞し妨害あらしむるなり、

是以聖人爲腹不爲目。

〔字訓〕腹は外物を以て己を養ふものなり、目は外物に見とれひかれてその爲めに役せらるゝものなり、いざさらば雪見に

ころぶ處まで、蕉翁尾張の風月堂にてよめる句、とは、風雅なれども、同じく目の外物にひかるゝなり、

〔解義〕 それ五色五音五味よりして、馳騁田獵、難得之貨、すべてその物その事を目にも耳にも觸れざる樣にあるべしと云はんは、あまり不情なるべし、これに處するいかんすべき、以上發端、そも〳〵聖人は、五色うるはしきは、目の養ひ、五音やはらぐは、耳の養ひ、五味のうまきは、口の養ひ、馳騁田獵は、氣體の養ひ、難得之貨は、用を足すまでのものとして、天地間萬物は、みな吾を養ふの具となし玉ひ、あるに任せて、あながちに心を留め玉はざるは、これ爲腹と云ものなり、その上にその事に心ひかれ身をやつすことなきは、これ不爲目と云ものなり、

故去彼取此。

〔解義〕 この故に聖人は、彼の物にひかれまよふのしかたを去り、此の物をもて吾を養ふのしかたを取り行ひ玉ふなり、

〔餘論〕 聲色酒食をはじめ萬の物、衆人はこれに執著して吾を害するの具となる、聖人はこれに心を留めずして吾を養ふの具となるなり、唐の太宗の蘭亭帖王羲之真蹟を殉葬せしむる如きも、至情なれども執著を免れず、雲烟過眼たゞその場までにして心を留むべからざるの說、蘇東坡の文にもみゆ、要之その境に向て心澹泊なるべきことなり、又後漢の華佗の養生の術に、五禽の戲れを誨ふる說に、人體欲得勞動、穀氣得消、但不可令極耳、前條の馳騁田獵、その度をすゞさゞれば、氣體の養ひとな

ることと知るべし、

十三章

〔章意〕凡そ人は、富貴榮華の境に臨み、その心泰然として動ずることなかるべきなりと云意を示せるなり、

寵辱若驚。

〔字訓〕寵は高貴の類、辱は貧賤の類なり、若驚の二字、若驚とよむこと常なり、但し釋文及び王註の意は、若驚の意と見ゆ、元來若如而の三字、古書に多く通ひ用ゐたり、

〔解義〕衆人は物に驚き易し、寵きことに驚き、辱きことに驚き、とにかく胸はさわぎづめなり、

貴大患若身。

〔字訓〕大患は災禍なり、今こゝには榮寵のことをさして大患と云へり、榮あれば枯あり、寵あれば辱あり、故に榮寵をさして大患と云へり、凡人は周易の童觀と云ものにて、一寸さきは闇の夜なり、一のうらに六あるを知らず、榮寵に大患あるを知らず、故に榮寵に驚くべからざるを示さん爲め、すぐに詞をかへて大患と說きしなり、これことさらに辭を激して人の警めとせるなり、若身とは、しかもそれを吾が身に與ふるやうにするなり、

〔解義〕秦の李斯、晉の陸機も、榮寵ならずんば後の害はなかるべし、まさに知るべし榮寵は大患なり、然るに衆人榮寵を貪り

て、終にその大患にかゝるは、これ大患を貴でしかもその身に與ふるなり、

何謂寵辱若驚。寵爲下。得之若驚。失之若驚。是謂寵辱若驚。

〔字訓〕寵と辱とは、相反してありながら相因るものなり、寵なければ辱もなし、これ辱は寵より生ずるなり、寵のみありて辱なくんば、寵は上と云べきなれども、寵に辱のあるなれば、寵は卽ち下なるもののみ、故に寵爲下と云へるなり、こゝ二節問答を設けてとく、

〔解義〕問て曰、何をか寵辱若驚と云や、答て曰、寵は辱の本なり、上とするにたらず、下れるものなり、然るに衆人はたゞ上もの

とのみ思ひ、寵を得れば驚きよろこび、寵を失へば驚きなげく、これを寵辱若驚と云なり、これ凡人の態なり、

何謂貴大患若身。吾所以有大患者。爲吾有身。及吾無身。

〔解義〕問者又曰、何貴大患若身と云や、答て曰、それ大患は徒は來らず、大患を招くゆゑんは、吾わが身を吾がものとして身を思ふ心にて寵を貪るより起るなり、吾わが身を吾がものとせず、吾が身を思ふ心なければ、寵を貪らず、吾何の患あることあらんや、

故貴以身爲天下。若可寄天下。

〔字訓〕貴以身とは、貴身と云が如し、貴は大切とするなり、寄はまかせるなり、

〔解義〕富貴榮華を貪りてその身を忘るゝは、其身を大切にせざるものなり、富貴榮華の爲めに其身を失ふことなきは、身を大切にする人なり、かゝる人こそ天下を任すべけれ、

愛以身爲天下。若可托天下。

〔字訓〕愛以身とは、愛身と云が如し、愛も大切にすることなり、托もまかせることなり、

〔解義〕富貴榮華の爲めに其身を損するは、身を愛せざる人なり、富貴榮華の爲めに身を損することなきは、身を愛すると云ものなり、かゝる人こそ天下を任すべけれ、其身のことをも忘れ、富貴榮華に眼くらむ人には、天下は任せられざるなり、

〔餘論〕寵辱若驚とは、寵辱にうろつきさわぐにて、凡人のすることなり、賢哲人の如きは、寵辱に驚くことなき由、但しその不驚に心術の差別あり、今略して之を擧ぐれば四科なり、夫れ吾儒に於ては、吾が當然の道を盡し、その上の吉凶禍福は、天の命のまゝにして、吾心泰然として不動、寵にも不驚、辱にも不驚、孟子浩然之氣の章に所謂の不動心これなり、これ儒家に所謂の寵辱不驚の人なり、又論語、令尹子文、三仕爲令尹、無喜色、三已之、無慍色、舊令尹之政、必以告新令尹、是亦たゞ國の爲のみを思ひ、その身の浮沈は、いかなるとも意とせざるなり、是亦寵にも不驚、辱にも不驚の人なり、又老子の意の如きは、すべて天地の間を大觀するに、寒あれば暑あり、晝あれば夜あり、寵あれば辱あ

り、辱あれば寵あり（この說、第二章にも出づ）、寵も驚くに足らず、辱も驚くに足らずとせるなり」、又莊子の如きは、人間一生百年は胡蝶の夢なり、寵と云も夢なり、辱と云も夢なり、すべて此世のこと、寵と云も、何ほどのことあらん、辱と云も何ほどのことあらん、ともに蠻氏觸氏の理のみ、白詩に、蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身、寵も吾が靈臺を猾すに足らず、辱も吾が靈臺を猾すに足らず、ともに皮外を通らして、吾が心中へは入るべからずとして、寵にも不驚、辱にも不驚なり、さてこの四說不同ども、其心の動ぜざるは同じ、凡そ事をなすは、心動ぜざるにあらざれば、事を濟し得ることなし、寵辱の境に處し、泰然として壁立萬仞なることを要すべし、

十四章

〔章意〕此章は、大道は無なるものなり、聖人執此而御世、し玉ふことをのぶるなり、

視之不見。名曰夷。聽之不聞。名曰希。搏之不得。名曰微。此三者。不可致詰。故混而爲一。

〔字訓〕夷はたひらなり、希はまれなり、微はかすかなり、この三字、たゞ無の換へ字なり、詰は問ひ究むるなり、混は同なり、一は無を云なり、

〔解義〕夫れ道は妙なるものにて、視之不見、無色ものなり、名づけて夷と云べし、聽之不聞、無聲ものなり、名づけて希と云べし、

搏之不得、無形ものなり、名づけて微と云べし、夷は平なり、希はまれなり、微はかすかなり、此三つのもの、その分ちある如し、但その分ちを問ひ究めんとすれども、問ひ究むべからず、もとよりその分ちなきものなり、故に同じくみな無なるのみ、

其上不皦。其下不昧。繩繩兮不可名。復歸於無物。是謂無狀之狀。無象之象。是謂惚恍。

〔字訓〕其とは道をさして云なり、繩繩は長くして不絶なり、復歸はつまりなり、惚恍は、遊仙窟の訓に、それかあらぬかと訓ず、これ日本の古き訓なり、有るとも無きとも定めかねたる詞なり、一説に、恍は有なり、惚は無なり、有とも云ひがたく、無とも云ひがたし、故以惚恍名之。

〔解義〕上にあるもの日月星辰は皦なり、下にあるもの土石水泉地中にあるをさす、は昧なり、たゞ道は、上に在て皦ならず、下に在て昧からず、上にあり下にある、その體ことなる所なし、又萬物は、みな始あり終あり、たゞ道は、繩々として長く、終もなく始もなし、夫れ物、色あるものは色を以て名づけ、聲あるものは聲を以て名づけ、形あるものは形を以て名づくべし、たゞ道は、色もなく、聲もなく、形もなし、その體かくと名づくべからず、名づくべからざる所以は、つまり一物あるにあらざればなり、是を無狀して狀あり、無象して象ありと云べし、これをそれかあらぬか惚恍たるものと云べし、

迎之不見其首。隨之不見其後。

〔解義〕夫れ道は之を迎へて其首をみんとすれども見えざれ

ば、道は無始ものなり、これに隨ひゆきて其後をみんとするに見えざれば、道は無終ものなり、無始無終、天地開闢以前よりただ如此ありて、つねにかはることなきものなり、豈妙なるものにあらずや、

執古之道。以御今之有。能知古始。是謂道紀。

〔字訓〕今之有とは、事をさすなり、

〔解義〕聖人はその妙なる古の道を執り、その身に體し玉ひ、今日のことを治めはからひ、能くその古その始を知り玉ふなり、是を道の紀と云なり、

十五章

〔章意〕この章は、聖人道を身に具へ、深玄なることをのぶるなり、

古之善爲士者。微妙玄通。深不可識。

〔字訓〕微妙玄通、四字ともにつまりおくゆかしき意なり、字義は、微は顯と反對す、あらはれず、かすかなるなり、妙は粗と反對す、粗ならず、たへなるなり、玄は白と反對す、あきらかならず、くらきなり、通は塞と反對す、塞がらず、いきぬけなり、

〔解義〕夫れ古の善士は、微妙玄通にして、おくゆかしく、その德深くして、外より測り知ることを得べからざるものなり、

夫唯不可識。故强爲之容。

〔解義〕夫れたゞその德のふかきこと、測り知るべからず、故に今强ひてそのやうすのやゝ似たる所をのぶるなり、

豫兮若冬涉川。

〔節意〕こゝ事に當るときのことを云、

〔字訓〕豫猶ともにもと獸の名にて、疑ひ多きけものと云へり、それよりためらひて不果ことを猶豫と云、こゝその二字をわりて用ゐたるなり、

〔解義〕彼の凡人の忍性なくたやすく言を出し手を下す輕卒なるものゝ如くならず、古の善士は、事に向て瞻前、慮後、（この四字、周武王銘）の銘、ためらふて、ずいとは踏みこまず、需姑とひかへ、その體は、たとへば冬の寒きころ川を渉り越すものゝはいり兼ねたる如くなり、

猶兮若畏四隣。

〔節意〕こゝその意について云、

〔字訓〕四隣は、四方の隣國なり、

〔解義〕凡人の剛柔好惡、すべてその意その趣のあらはれて一目瞭然たるとは同じからず、ためらふて、その意の向ふ所いづれにありとも外目に見えざること、たとへば小國は中に在て四隣の大國を畏れて、何方へ向はんとするやらんその趣のみえざるが如きなり、

儼兮其若客。

〔解義〕そのしんとして躁がしからざること、客たるものゝしづかなるが如きなり、（以上本文をとき了、）凡人の篠のうちに鈴をつけたる如く躁がしき體のなきなり、

渙兮若氷之將釋。

〔字訓〕渙はちると訓す、こゝにてはゆるやかの意にとる、

〔解義〕そのゆるやかにして窮屈ならざること、氷の融けんとする如きなり、

敦兮其若樸。

〔字訓〕敦はあつしと訓す、樸はあら木なり、山から伐り出したるまゝにて、角柱圓柱などにいまだ木どりせざる木なり、飾なき意にとる、

〔解義〕そのあつくじつちりとしたること、未削木のありのままなるが如きなり、

曠兮其若谷。

〔解義〕その量曠くして、いみきちひなくうけ容るゝこと、谷のむなしきが如くなり、

混兮其若濁。

〔解義〕そのやうす昭々たることなく、渾然としてその境の見えざること、水の濁りて看透しがたきが如くなり、以上七つ若しく〳〵と云へるは、そのやうすの形容し盡しがたきにより、並べ立てゝ云なり、

孰能濁。以靜之徐清。孰能安。以久之徐生。

〔字訓〕二の之の字は、人をさすなり、孰能とは、よびかけたる辭

なり、でき難きこと故にかく云ひかけたるなり、徐はそろそろの意なり、濁とは賢きふりをせざるなり、清とはきよらげなる善きものとなるを云、安とはじつちりとおちつきたるなり、久とはいろ〳〵にかはることなく己がする樣をその通りながくとぐるなり、生とはすぎはひしいきながらへてゆくを云なり、

【解義】 已昭々たれば人さわぎ、已動けば人動く、其機のむつかしきものなり、以上發端、夫れ世の人、孰か能く已昭々することなく濁るが如くにて、人々を靜かにし躁がしからざらしめて、漸漸に清らけきよきものとならしむることをせん、孰か能く已安くおちつきて、人々を久しくその道にすわりてあらしめ、漸々に生ながらへてその性をとぐることを得しむることをせん、これぞ古の善士のみ能くすることなる

保此道者。不欲盈。夫唯不盈。故能蔽不新成。

【字訓】 不欲盈とは、虛なるを貴ぶなり、才德ありながらありとせざるなり、蔽はおほふなり、物に帛などを上からかけたる如き意なり、新成はあたらしくできたるなり、きらびやかなるの意なり、

【解義】 かゝる道を保つものは、盈つることを好まず、たゞ虛なるを貴ぶなり、夫れたゞ盈たず、虛にして無德のものゝ如し、それ故に能ある鷹の爪かくし、よくその德を蔽ふてあらはさずして、きらびやかに新成のものゝ如くせざるなり、

十六章

〔章意〕この章は、靜は道の體、物の本なり、人心も亦靜なるべし、動は妄なり迷なり、よろづの咎は、動より生ずることを示せり、

致虛極。守靜篤。

〔字訓〕致は極致十分なるなり、虛靜二字ともに無のことなり、但し虛は實と反對にて、心虛にして雜慮妄念のなきなり、靜は動と反對にて、心靜かにして動き躁ぐことなきなり、（韓非子の主道篇に虛は無心なり、靜は無爲なりと解す、さす所少しく異なり）極は至極なり、篤は俗語のしつかりとせる意なり、

〔解義〕そも〳〵人の心は、つねに虛靜なるべきなり、其心思ひたくみの塵埃なく、鏡の如く虛しきことを致むれば、至れりと云べし、又其心動きさわぎの風波なく、水の如く靜なるを守れば、篤しと云べし、（こゝ虛靜の二つを並べとけり、下文はたゞ靜のことのみをとけり、）

萬物竝作。吾以觀復。

〔字訓〕萬物とは泛き詞なれども、今姑く人を主として解す、萬民と云如し、萬物並作とは、衆人たちて事を爲し營むなり、復はもとの靜にかへるなり、

〔解義〕出門皆有營、尊き卑き善き惡しき、己々の思ふさまみなたち出てなしいとなみ、天地一大劇場のさわがしきが如きなり、（天地は一大劇場、日月は灯、江海は油、堯舜は善、莽操は惡、方古今を芝居に見立てたる清の康熙帝の語あり、）これ萬物の作りたちたる姿なり、（以上萬物並作の一句をとく、）さてそのさわがしきは久しからず、いく程もなく境換はり時移り、影消え音絶えて、舞臺寂寥として靜なるものなれども、一葉ちる風の行ゑと事の終りを知るもの

なし、吾以てもとの靜に復るを觀る、それ萬物は靜より出づ、靜に復るは天地自然の道理なり、然るに紛れ動て靜に復るを知らざるは、凡夫の迷ひなり、（以上吾以觀復の一句をとく、）

夫物芸芸。各復歸其根。

〔字訓〕芸芸は盛んなるなり、復歸其根とは、物のもとにかへるを云なり、

〔解義〕夫れ物芸々、花も紅葉も一盛り、各復歸其根して、やがて花散り葉も落ちて、木下に朽ちて土となるものなり、

歸根曰靜。靜曰復命。復命曰常。

〔字訓〕歸根とは、草木にて云詞なれども、それを借り用ゐてこは人事を云なり、命は註に性命とあり、天性なり、常はとこしなへにいつもかはらざるなり、

〔解義〕たとへば花散り紅葉落ち、木下の土となるときは、花の薫りもあらざれば、紅葉の紅の色もなし、これ物のもとに歸るは靜と云べきなり、（以上歸根曰靜をとく、）そも〳〵人の心は、動くは迷ひなり、靜かなるは天性なり、すでに靜かなるときは復天性（本文の命の字に當る、）と謂ふべきなり、（以上靜曰復命の一句をとく、）それ人の心の紛れ動くは、境により時に隨ふ習ひにて、剛ともなり柔ともなり、善ともなり惡ともなり、傀儡師胸にかけたる玉手箱、佛出さうと鬼出さうと、そのをり〳〵に面革りして、定まれる姿なし、（以上發端、）たゞ靜かにして紛れ動くことなく、その天性にかへりたるのみぞ常にかはる色なきなれ、これを復命を常なりと曰ふべきなり、（以上復命曰常の一句をとく、）

知常曰明。不知常。妄作凶。

〔解義〕常にかはらざる理を知て、その心靜なる人は、智の明なると云べし、もしこれを知らざる人は、其心紛れ動て靜ならず、手妄りに持ち、足妄りにふみ、耳妄りにきゝ、眼妄りに視、口妄りに言ひ、心妄りに思ふ、一身のふるまひ妄りならざるなく、これぞ生地をはなれ死地に入るのすがたにて、みづから凶害を招くなれ、

知常容。

〔解義〕常なる理を知れば、その心に面革りなくして、その量宏く、よく人をうけ容れて、厭ひ惡みて外ることなきなり、近く東照公の事に准ずれば、佛高力鬼作左どちこちつかずの天野三郎兵衛、その氣癖のさまぐなるを、皆それぐに用ゐ玉ふ、是れ容と云ものなり、

容乃公。

〔解義〕よく人をうけ容るれば、乃ち私なく公なる心なり、或歌に、草も木もおしなべて吹く風なればそのほどくに涼しかりけりと、これぞ公なる理ならんか、

公乃王。

〔解義〕よく私なく公なれば、乃ち王者の心なり、そもくすでに王者と稱すれば、天下の王なれば、天下のあらゆる物に、その

心隔てなく、天下一家、四海一人（二句、諸記註に本づく、）と看做し、引よせて柴の戸結ぶ賤が家のわびしき鰥寡孤獨まで、凍餒の艱なからしめんと、その惠の至りとゞかざる所なきより、王なりと云なり、

王乃天。

〔解義〕よく王者の心の如くなれば、乃ち天の廣大なるにひとしきなり、今は昔、源明公の時、或人尾州の鴨は美しと云、公の曰、天に隔てはなしと、隔てなきものは天なり、然れば王者の心の如く隔てなければ、やがて天にひとしき理なり、

天乃道。

〔解義〕よく天の廣大なる如くなれば、乃ち道をその身に具へ得たるなり、

道乃久。

〔解義〕よく道を身に具へ得るときは、その身安く全うして長久に保ち得べきなり、

沒身不殆。

〔解義〕かゝる人は、我より物を害することなければ、物よりも亦我を害せず、蜂蠆も觸れざれば人を螫さず、蛇蝎も犯さゞれば人を噬まず、天地の間ゆく處としてこはき物なく、身を沒るまで危難に値ふことさらになし、これ皆心靜なる德の效驗なり、靜の道たる、豈貴からずや、余嘗て源玄同公の寫眞に賛して

有曰。厥靜厥動。孰測孰程。如水之止。如風之行。と所謂如水之止は、即ち靜のことなり、

〔餘論〕源瑞龍公の時、宮本武藏を召し畫を命ぜらる、武藏筆を取り畫きけるとき、竊に侍臣二人に命じ、左右より不意に撓めて打ちかゝらしめらる、武藏心得たりと、唐紙持ちながら後へさがり引きはづし、そのかきかけたる唐紙を、下りながらくるくると卷き竹刀の如くし、それにて二人と仕合ひせるに、その紙折れざりしよし」（このこと松平巴山の話、澁美の言に似たれども、名人のわざ測るべからず、故にこゝにのす、）東海道原驛の寺に住せる白隱禪師（世に畫など多く傳はる、）尾張の士人尋ねより、禪學のことなど話せるとき、白隱より兩手打つ音は誰もきけり、片手打つ音を聞けりやと問ふ、その答に人みな惱めり、このことを成瀨隼人正（淨翁）聞き、その後立ちよりて、同じく禪學の物語りありしとき、白隱例の如く片手の音を聞き玉ひしやと問ふ、隼人正答て曰、聞きたりと、白隱さては大國の執政ほどありて、これは格別感じ入れりと云て、その座をたつて、それなり再び來ちず、隼人正餘りに待ち久しく、いかゞのことやらんと、客殿庫裡など自分にさがしあるき見らるゝに、一人も人げなし、こは不審なりと、いよ〳〵さがし行くほどに、白隱は步障のかげよりわつと云恐しけり、隼人正思ひがけなき處にて、あつと一聲發しられければ、白隱の曰、片手の音を聞ける人のこれ式のことに驚くはいかに、そのやうなることにてはちちあかぬ、歸り玉へとて、問答せざりしよし、（これも亦巴山の話、）今この二條をあぐるは、心の靜と不靜とを考ふべき爲めのみ、易に曰。震驚百里。不喪匕鬯。この意は、大雷の聲百里を驚かすほどにても、心をさまりて手

に持ちたる匕箸をとり落さずとなり、これ尤難きことなるべし、

十七章

〔章意〕この章は、老子世道の日々に衰ふるを見て、太古無爲の治に復へさんことを思ひてのぶるなり、

太上下知有之。

〔字訓〕太上は太古なり、一説に聖人を云、今不從、

〔解義〕今天下日に衰へ日に亂れ、可歎姿なり、いかでかこれを太古の治にかへすべき、以上發端、夫れ太古の時、聖人天位にましまして世を治め玉ふや、無爲の事をなし不言の敎を行ひ玉ふが故に、その治めかた目だつ迹なし、それ故に萬民たゞ上に帝ありと知るのみにて、日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力何有於我哉、と思へるなり、これ三皇五帝の時代なり、

其次親而譽之。

〔解義〕時代やゝ降りて其次と云べき君は、無爲の道を以て治むること能はず、仁恩を施して萬民を懷け玉ふ、故に萬民なつきしたしみてこれを譽むるなり、これ夏殷周三代の始なり、

其次畏之。

〔解義〕又その時代やゝ降りて其次と云べき君は、仁恩もて懷くること能はず、刑罰法度を以て萬民を威し惡を懲しむ、故に

萬民これを畏るゝなり、これ五覇の時代なり、

其次侮之。

〔解義〕又その時代ます〳〵降りて其次と云べき君は、刑罰法度を以て萬民を威し懲しむること能はず、權謀智術を以て天下を治む、故に天下萬民服せずしてこれを侮り蔑にし、法を犯し令に從はざるものありて、天下亂るゝに至るなり、これ戰國の世のさまなり、

信不足焉。有不信焉。

〔節意〕この一節は、其次侮之のことをのぶ、

〔解義〕そも〳〵萬民の侮るに至るは何故なりや、もと己が誠信足らずして、たゞ權謀智術もて世を推しくろめんとするにより、萬民亦信服せずしてこれを侮るに至るなり、

悠兮其貴言。功成事遂。百姓皆謂我自然。

〔節意〕この一節は、太上知有之のことをのぶ、

〔字訓〕貴言は、言を大切にして妄りにいはざるなり、號令など煩はしく出すことのなきを云なり、

〔解義〕貴ぶべきは太古聖人の治なり、聖人の治は、悠兮として言を重んじ、煩はしく號令を出すことなく、天下萬民の爲すに任せ玉ふ、かるが故に天下萬民、各己が性分のまゝを爲し、男は耕し女は織り、山は樵し海は漁し、功成り事遂げ、家々給り人々足り、豐なる代となり、皙々自得して、これ我が天性自然にて爲

し得ることなりと謂て、聖人上にましく〳〵てその德化の然らしむる所なるを知らず、聖人はたゞ上位にましますのみと思へるなり、

十八章

〔章意〕大道行はれて、一世蕩々無爲ならんには、仁義忠孝と云までもなきなり、四河入海無二河名、（佛經の語、）無爲の世には、仁義忠孝の名なきなり、仁義忠孝の名あるは、世の降れるしるしなり、かゝる名もなき古こそ慕はしけれ、

大道廢有仁義。

〔解義〕夫れ太古無爲の大道世に行はれし頃は、風儀厚く人氣和ぎ、仁もて愛むべき窮民もなく、義もて正すべき惡人もなければ、仁もいらず義もいらざるなり、（以上發端、以下本文を設く、）然るに時代降りて、無爲の大道世に廢れ、人みな有爲のことを爲し、風儀の厚かりしも漸く薄く、人氣の和げるも漸く暴くなり、ゆくまゝに窮民多く、惡人も亦少からず、於是乎、始めて仁義など云へる道を立てゝ敎へ諭すこととはなれるなり、然れば仁義と云へることは、やむことを得ず後に設けたる敎のみ、末のことなり、末を逐ふて本を忘るべからず、

慧智出有大僞。

〔解義〕上純質にして下亦純質ならば、誰か僞りをなすものあらんや、（以上發端）然るに上もしさがしく智慧を用ゐて下を治め、隱

れたるを訐き、微なるを徼ひ、毛を吹き疵を索め、嚴密苛察なるときは、下も亦その心にて只管に避け隱さんとして、僞多き世となりて、なか〳〵にあつかひ難きものとなることなり、以上本文をと

〳〵姑く一事についてこれをみれば、古は結繩の政と稱し、ものの覺えには繩を結べることの由、その後僞ある世となりて、券契と云もの起る、周禮によりこのこと多くこれを嚴す、又その後符節と云ものを作り、又花押と云ものを書くこととなり、花押は、僞を防ぐ爲のもの故、自筆にて書き、にせのできざるやうにすること本意なるよし、貞丈雜記等に見ゆ、今又印を押すことと天下一般の制度なり、古は印はしるしに佩べるものにて、これを押すものに非ず、押せば左文字となるなり、然るに今世の如きは、俗に所謂の冒書冒判つねに多し、これ僞を防ぐの具益多ければ、僞益多し、智慧の恃むべからざること知るべし、

六親不和有孝慈。

〔解義〕一家六親、父子兄弟夫婦たるもの、うつくしく相和げるときに孝子無きにあらざれども、いづれを孝子と分つべきなし、以上發端然るに六親なかあしく不和むつかしき時に至り、始めて孝子と看分くべきものあるなり、堯も顏回も不孝にあらざれども、ひとり舜と閔子騫とを孝子と稱するは、繼母にして大親不和なり、

國家昏亂有忠臣。

〔解義〕國家靜謐なるときに忠臣なきにあらざれども、いづれを忠臣と分つべきなし、以上發端然るに國家昏〳〵、亂れたるときに

至り、始めて忠臣と看分くべきものあるなり、伊尹周公不忠にあらざれども、ひとり龍逢（夏の桀王を諫めてころさる）比干（殷の紂王を諫めてころさる）を忠臣と稱するは、桀紂の昏亂に値へばなり、夫れ忠臣孝子は美名なり、美名の起りは六親不和國家昏亂の大惡より生ずるなり、さては世の中のありさまは善は惡（ワルキ）が本なれば、その善と云ともなき世こそめでたけれ、

十九章

〔章意〕世を治むるは、只無爲にして靜なるべし、聖智仁義巧利、これみな有爲の具なり、いたづらに世のさわがしきを增すのみ、無爲に歸するにしかず、文治愈（イヨイヨ）勝れて、世道愈降る、詐を絶ち淳に還るにしかざるなり、

絶聖棄智（レバ）。民利百倍。

〔字訓〕聖の字は、聖人のことに用ゐれば、全德の名なれども、本文の如きは、たゞさとく明かなるを云、智のことなり、

〔解義〕凡そ民と云へるものは、菅（スゲ）の小笠に草鞋（ワラジ）して田を耕すまでなれば、聖もいらず智もいらず、然るにもし上より聖智を貴んで世を治め、聖智行はるゝ世となるときは、知るも知らぬも世につれて、なまじひに聖智を心懸け、事を起し訟を好み、業を怠り產を破り、さまゞ害となるものなり、（以上發端）故に國を治むるには、無爲の道を以てして、聖を絶ち智を棄てゝ、民の心を動かさゞらしむれば、愚なるは愚なるまゝにして、その生業一すちを打ち守り、心安く身も穩にして、民の利となること百倍

なり、（以上本文をとき了る、）孟子曰、惡智は、その鑿ちいらざることをすれば
なり、仲尼曰、人皆みづから予智ありと曰へども、罟擭陷阱の如
き禍に陷りて、これを避くることを知らずと、これ亦智の害あ
ることを戒められたるにて、その意は略同じ、たゞ老子の詞激
切なるにより、人耳を驚かすのみ、

絶仁棄義。民復孝慈。

〔字訓〕復は天性にかへるなり、

〔解義〕もし仁義行はるゝ世となれば、仁義と云へば、人も許し
我も足れりとし、外面を和げて仁を僞せ、威風を嚴にして義を
詐り、人眞似ばかりの仁義にて、實心より出づるはなし、（以上發端）故
に國を治むるに無爲の道を以てし、仁を絶ち義を棄て、詐僞の
型とすべきものなければ、民各その性の自然なりにまことし
き孝慈をいたすべし、

絶巧棄利。盜賊無有。

〔解義〕もし巧利行はるゝ世となるときは、人みな巧利を貴ん
で、己が巧に任せ利を射んとして、つひには盜賊をもするに至
るなり、（以上發端）故に國を治むるに無爲の道を以てして、巧を絶ち
利を棄て、人みなその拙に安んじ、（巧の反）しかも貪らざる（利の反）世
となれば、人の心すなほにして、世に盜賊はなかるべきなり、

此三者以爲文不足。

〔解義〕聖智仁義巧利の三つの者は、文飾華美なるものなれど

も、國を治むるの實用には足らざるものなり、古人の所謂畫餅の如しとは、かゝる類なるべし、絶ち棄つるにしかず、

故令有所屬。見素抱樸。少私寡欲。

〔字訓〕屬は心をつけ心をよせるなり、素は天性のまゝにて飾を加へざるなり、樸は天性のまゝをみだし散らさゞるを云なり、

〔解義〕夫れ彼の三つの者は、用ゐるに足らず、故に民をして心をかけしめず、別に心をよする所あらしむ、そは民をして各その天性に飾を加へざらしめ、（こゝ見素の二字をとく）又その天性をみだしちらさず、生れつきのなりを守らしめ、（こゝ抱樸の二字をとく）その己を思ふ私を少くし、（こゝ少私の二字をとく）又その物に惑ふ欲を寡くせしむるなり、（こゝ寡欲の二字をとく）果して如此ならば、人氣上古の如くなるべし、これ聖人無爲の治と云べし、各生れつきの其まゝにて、人の心恬ならしむるなり、

〔餘論〕絶仁棄義、その言の激切なる最人の耳を驚かす、然れどもその意たゞ僞を絶つにあり、もし辭のみに拘りて、その意を得ずんば、山の端の月をさす指をみて月を忘るゝ類なるべし、

老子講義卷三

牧山佐藤先生著　藤井籤
永田新次郎　同校

二十章

〔章意〕この章は、聖人は在俗不俗居塵無塵、世人と異なるを云なり、

絶學無憂。

〔解義〕それ蜘蛛の網を張り、禽鳥の巣を作る、巧なり、しかも誰にかこれを學ぶ、況や人は是れ萬物の靈、各その天性自然に足

り備はりて缺くることなし、固より學を須つことなし、そもく學はまねぶと訓じ、他のまねをして己が天性になきことを益すものなり、梅に甘き味を加へ砂糖に辛き氣を添へんとする如し、もとこれ爲し得べからざるのことにて、徒に憂をなすのみ、以上發端故に學を絶ちやめて、只その天性自然のなりを全くすれば、その心安くして憂なし、

唯之與阿。相去幾何。善之與惡。相去何若。

〔字訓〕唯は恭しき應なり、阿は慢る應なり、相去は隔つなり、相たがふを云なり、

〔解義〕唯と阿と、その應の相去るいかほどなりや、善と惡と、その事相去るいかんぞや、世の人は學を善といへども、我よりこれをみれば惡きのみ、

人之所畏。不可不畏。

〔字訓〕人之所畏とは、刑を云なり、不可不畏とは、學を云なり、

〔解義〕世の人みな有所畏、世の人は刑せられて形を損すを畏るゝなり、吾も亦不可不畏、吾は學んで性を益すを畏るゝなり、益と損と、そのこと異なれども、その害同じ、それ刑せられて形を損すものは、鶴の脛を截るが如し、學んで性を益すものは、鳧の足を續ぐが如し、鶴の脛長しといへども、これを截れば泣き、鳧の足短しといへども、これを續がば亦悲むべし、これ吾學んで性を益すことを畏るゝ所以なり、

荒兮其未央哉。

〔解義〕我と世の人と、その趣の異なること、荒兮にして央りなきかな、

衆人熙熙。如享太牢。如春登臺。我獨泊兮其未兆。如嬰兒之未孩。

〔字訓〕熙熙はたのしむなり、享は食なり、太牢は牛羊豕の肉、美食を云なり、未孩、孩は笑なり、笑へば情動く、未笑は情の動かざるなり、

〔解義〕世の人は、富貴利達のことには、熙々としてすゝみ、珍膳美食に向ふが如く、長閑なる日に高き臺に登るが如く、その心さわ〳〵として躁がしきなり、我獨心しづかにして、富貴利達の念兆さず、いまだ笑ふことも覺えざる嬰兒の好惡の情なきが如くなり、

儽儽兮若無所歸。

〔解義〕我に於ては、富貴利達、何一つ心にとむることなくして、儽々兮として趣く方なきが如し、（已上本文をとき了）魯論に孔子の不義而富且貴於我如浮雲といはれたるも、この意なり、いづれの聖人も、欲を離れたるものなり、寡欲一分、卽近聖人一分。この處より聖人を學ぶべしと陽明の敎ふるも、實に深切なることなり、

衆人皆有餘。而我獨若遺。

〔解義〕世の衆人は、みな富貴利達の志願ありて、心胸に盈ち滿てり、（この有餘の二字を說く）我獨然せるのぞみなく、無欲にしてもの遺れせ

る如くなり、

我愚人之心也哉。沌沌兮。

〔解義〕我は愚人にひとしき心なる哉、沌々として知ることなし、

俗人昭昭。我獨若昏。俗人察察。我獨悶悶。

〔解義〕世の俗人は、知を糺かして昭々たり、我獨智を韜みて若昏なり、世の俗人は、萬の事細に明にせんとして察々たり、我獨知ることなきが如く悶々たり、

澹兮其若海。飂兮若無止。

〔解義〕我心は澹兮としてそれ海の廣きが如く狹からず、飂兮として物に拘ることなく窮屈ならざるは、止まるところなきに似たり、

衆人皆有以。而我獨頑似鄙。

〔解義〕世の衆人は、みな智を以て事をせんとす、我獨ものゝ分ちをも知らずして、こゝ頑の字をとく、鄙人の如くなり、

我獨異於人。而貴食母。

〔字訓〕食は味ふなり、母は道をさすなり、

〔解義〕それ世の人は、知るも知らぬも、末に趨り學を爲して智をみがき、富貴利達の榮華のみに志し、無爲の道を知る者なし、

我獨世の人とは異にして、無爲の道を味ひて澹泊なることを貴ぶなり、（已上本文を說きて、）それ衆に同じき者を衆人と云、今その衆に異なること如此、釋尊の所謂天上天下唯我獨尊とは、かゝる人のことなるか、

二十一章

〔章意〕この章は、道は無にして萬物を生ずるの妙を反覆咏歎せり、

孔德之容。惟道是從。

〔字訓〕孔は註に空也とあり、孔はもとあなのことなり、それより轉じて空の義となるなり、容は樣子なり、道は無の道なり、

〔解義〕人の心は空しかるべきなり、もしさなくして、やくやもしほの身も焦るなど云へる如く、胸に思の絶え間なくば、いかに妙なる道ありとも、いかでその心にうつるべき、古の聖人は、その心空蟬の空しき德を具へ玉ふゆゑに、唯道に從ひ玉ふなり、

道之爲物。惟恍惟惚。

〔字訓〕恍とは有而似無、惚とは無而似有と註ありて、遊仙窟の訓にそれかあらぬかと訓ず、

〔解義〕さてもその聖人の從ひ玉へる道は妙なるものにて、有とやせん無とやせん、心も言も絶え果たるものにして、それかあらぬか恍惚たり、

惚兮恍兮。其中有象。

〔字訓〕象はかたちと訓ずれども、そのかたち眼にみえて手にとれざる光色などの類を象と云、常には日月星などのことに多く用ゐたり、こゝは日月星にかぎらず泛く云へり、

〔解義〕それかあらぬかその中に、萬の物の象を具へたり、實に天ゆく太陽の光より、水にたゞよふ浮草の花の色まで、道より出でざるものはなし、

恍兮惚兮。其中有物。

〔解義〕それかあらぬかその中に、萬の物を具へたり、實に大にしては天地より、小にしては昆蟲の微に至るまで、道より生ぜざるものはなし、

窈兮冥兮。其中有精。

〔字訓〕窈冥は味くかすかなるを云なり、恍惚とその意同じ、とも に無を形容せるなり、精はまじりなきなり蓼の性は辛く荼、の性は苦きの類まじりなし、これを精と云、故に精とは卽萬物の一色づゝうけ得たる性のことなり、

〔解義〕味くかすかなるその中に、萬の物の性を具へたり、實に蓼の性の辛く、荼の性の苦き、それ〴〵にまじりなきもの、皆この道より生ぜざるはなし、

其精甚眞。其中有信。

〔字訓〕眞は僞の反、萬物の性、僞なくありのまゝなるを眞と云なり、蓼の辛く荼の苦き、僞なきものなり、信はたがはぬを云、萬物の性はたがはぬものなり、去年の蓼辛ければ、今年の蓼も辛し、山の荼苦ければ、里の荼も苦し、これたがふことなきなり、これを信と云、

〔解義〕萬の物のまじりなきその性は、甚僞なく眞なるものにして、その中にたがはぬ所の信ありて、蓼の辛きはいつも辛く、荼の苦きはいつも苦し、その性たがふことなきなり、

自古及今。其名不去。

〔字訓〕其名とは、無名を以て道の名とするなり、すべて名は形に因てつけたるものにて、まるきは圓と名づけ、けたなるは方と名づく、たゞ道は、形なければ無名なり、やがてその無名を以て道の名とせるなり、不去は消えざるを云なり、

〔解義〕それ道は形なければ無名、天地いまだ開けざる古より今に至るまで、無名と云へる名のみは不去なり、

以閱衆甫。

〔字訓〕以は無名を以てなり、閱はすべくくるなり、衆は萬物なり、甫は始なり、

〔解義〕道は無名なるものなれども、萬の物の始めをすべくくりて、これより生ぜざるものなきなり、

吾何以知衆甫之狀哉。以此。

〔字訓〕此とは無をさす、卽上の恍惚窈冥なり、

〔解義〕それ萬の物の始まる有樣は、妙にして知りがたし、吾いかにしてこれを知るや、此理を以て知るなり、物みな無より生じ、無より始まるなり、首章の衆妙之門と、其意全く同じ、

〔餘論〕道の虛無なること、上文しば〳〵出づ、餘論亦すでに述ぶ、老の反覆言厭ふべく、同じことながら今又少しくこゝに贅す、程子曰、冲漠無朕、萬象森然已具、程子老子指すところ少しく異なれども明哲の見る所略同じ、これ天地間古今の妙理にして、空論にあらざるを見るべし、その要は、道は靜なり、人の心も靜なるべしと云へるなり、これ凡そ人の失は、心の紛擾による、靜なれば中らざる鮮きが故なり、その靜の氣象たる、近く我心についてこれを觀るに、早朝時間心のすみたる如きは靜と云べし、童子に句讀を授くるに、朝はよく記憶し、晝は記憶あしゝ、これ心の靜不靜をみるべし、古より廷のことを朝廷と稱し、政は朝することゝせるも、その謂あることなるべし、傳習錄に似たる說あり、曰、人一日間古今世界、都經過一番、只是人不見耳、夜氣清明時、無視無聽、無思無作、淡然平懷、就是羲皇世界、平旦時、神清氣朗、雍々穆々、就是堯舜世界、日中以前、禮儀交會、氣象秩然、就是三代世界、日中以後、神氣漸昏、往來雜擾、就是春秋戰國世界、漸漸昏夜、萬物寢息、景象寂寥、就是人消物盡世界、學者信得良知過、不爲氣所亂、便是常做箇羲皇已上人、

二十二章

〔章意〕この章は、聖人の妙用、屈して伸ぶることを云へり、

曲則全。枉則直。窪則盈。敝則新。

〔解義〕すべて人、もし己が意を速に達さんとすれば、却て害あり、たゞ己を曲げて衆に從へば、つひに全きことを得べきなり、己速に直びんとすれば、却て抑へらる、たゞ己を枉めて人に順へば、つひに直ぶることを得べきなり、己が智力を驕滿すれば、却て毀らる、たゞ自らたらぬものとなりて在れば、つひに盈つるに至るなり、己が才德を著せば、長く保つべからず、たゞ自ら敝ひつゝみたるは、いつも新しきことを得べきなり、

少則得。多則惑。

〔字訓〕少は思慮作爲の少きなり、得は天性を得るなり、多は思慮作爲の多きなり、

〔解義〕それ道は無爲に在り、ゆゑに人有爲の少きは、其天性を得、有爲の多きは、惑ひて他岐に入り、其天性を失ふなり、

是以聖人抱一。爲天下式。不自見故明。不自是故彰。不自伐故有功。不自矜故長。

〔字訓〕抱は保なり、一とは天性なり、天性は各一つづゝもてるなり、鳥は飛の天性一つを得、魚は游の天性一つを得たり、故に天性のことをすぐに一と云へり、

〔解義〕是を以て聖人は己が天性一つを保ちて、天下萬民の式となり、士農工商、各その天性を離れざるやうになし玉ふなり、聖人自らその美をあらはさず包み玉ふ、故にその美自ら世に

明かなり、自らその是を是とし玉はず蓋ひ玉ふ、故にその是自ら彰るゝなり、自らその功に伐り玉はず、故にその功ながく有るなり、自らその善に矜り玉はず、故にその善長く保つなり、

夫唯不爭。故天下莫能與之爭。

〔解義〕 爭ふ者は、相手となして爭ふことをも得べし、今聖人はそれたゞ吾より爭ひ玉ふことなし、故に天下の人よくこれと爭ふものなきなり、

古之所謂曲則全者。豈虛言哉。誠全而歸之。

〔解義〕 古に所謂己を曲げて衆に從へば全しとは、豈虛言ならんや、たがはざる眞實の語なり、誠にその言の如くすれば、その身全くして天性に歸ることを得べきなり、

〔餘論〕 周易繫辭傳に曰、往者屈。來者伸。尺蠖之屈。以求伸也。龍蛇之蟄。以存身也。と、屈伸往來は、天地間至妙の理、このことは聖人たゞ周易に於て示し玉へり、老子この章、卽そのことなり、上文に所謂曲枉窪敝は、所謂屈なり、然るを曲は全、枉は直、窪は盈、敝は新なることを得るは、所謂伸なり、もしまづ屈することを知らずして、始より伸びんとするものは、伸ぶることを得べからず、たゞ能く屈するもの、能く伸ぶることを得るなり、尺蠖の蟲の如き、少しく屈めば少しく伸び、大に屈すれば大に伸ぶ、屈するほどづゝ伸ぶるなり、韓信市人の股下をくゞり、張良黃石公の爲に履をとりし如き、これみなよく屈して伸ぶることを得たるなり、

二十三章

〔章意〕この章は、物に自然あり、只自然に任すべし、暴疾なるべからざるを示すなり、この章、下半不可解、今姑舊說により說き去る、

希言自然。

〔字訓〕希はまれなり、希言は無言と云がごとし、

〔解義〕聖人の言は耳にさはらず、有れども無きが如くなるは、自然に出づる至言なり、孔子の言は渾厚、孟子の言は嚴厲、これ自然と自然ならざるとの分をみるべし、聖賢の差別在此、

故飄風不終朝。驟雨不終日。孰爲此者天地。天地尚不能久。而況於人乎。

〔解義〕すべて暴疾は好しからざることなり、飄風は一朝吹かず、驟雨は一日ふらず、はげしきものは速にやむ、孰かこの風この雨を起すものなるや、天地なり、その天地すら自然にたがふて暴疾は久しき能はず、況んや於人乎、暴疾ものゝ長く保たざるは、もとよりその理なり、楚の項羽木曾義仲を觀て、亦この言のたがはざるをみるべし、彼みなその勢一旦焰々として盛なれども、不旋踵して火の消えたる如くなれり、

故從事於道者。道者（この二字、淮南子に無し、削るべし）同於道。德者同於德。失者同於失。

〔字訓〕 德の字、註によれば得に作るべし、下同じ、

〔解義〕 それ人の上たるものは、善も惡も天下に推し渉るものなれば、最心すべきことなり、以上發端、吾自然の道を行へば、天下萬民同じく自然の道を行ふなり、こゝ從事於道者同於道の句を敍、吾天性を得れば、天下萬民同じく天性を得るなり、こゝ德者同於德の句をとく、吾天性を失へば、天下萬民同じく天性を失ふなり、こゝ失者同於失の句をとく、古堯舜の世には、比屋可封とありて、家毎に邦君にもすべき人がらなりと云、桀紂の世は、比屋可誅とありて、家毎に刑戮すべき惡物なりと云も、かゝる理なるべし、かく云へば只上のみを專責むるに聞えて、韓非などの說にては然に非ずと云べけれども、人主は天に代りて世を司り玉ふ任なれば、孔老の敎ともに上に責むるなるべし、

同於道者。道亦樂得之。同於德者。德亦樂得之。同於失者。失亦樂得之。

〔字訓〕 德の字、上と同じく得に作るべし、樂得之、この得の字は、相親しむの意、

〔解義〕 それ水は濕へるに流れ、火は燥けるに就き、同氣相求め、同聲相應じ、善も惡も同じ類の出で來るものなれば、これ亦心すべきことなり、以上發端、吾同じく自然の道を行へば、世の道を行ふ者、相親しむを樂みて相聚る、こゝ同於道者道亦樂得之の句をとく、吾天性を得れば、世の天性を得る者、相親しむを樂みて相聚る、これ堯舜の朝に、善人多き所以なり、こゝ同於德者德亦樂得之の句をとく、吾天性を失へば、世の天性を失ふ者、相親しむを樂みて相聚る、これ桀紂の朝に、惡人多き所以

なり、（こゝ同於失者失亦樂得之の句をとく、）

信不足焉。有不信焉。

〔解義〕もしこの理を知らずして、自然の道にそむき、天性をはなれ、暴疾を以て天下を治めんとし、吾に誠信たらずして、言に文飾あれば、下疑ふ（有不信をとく）て治まらざるなり、

〔餘論〕老子の説は、自然に順て無爲ならば、仁もいらず義もいらず、禮もいらず智もいらざるの説なり、然るに信のみはいらずと云はず、信の貴きこと可知、孔子の語にも、民無信不立とも ありて、たとひ無食して死するとも、死は自古所不免、無信片時も天地の間に立つべからずと云へり、有信ものには城をも可托、無信者には手簡一通も不可托、

二十四章

〔章意〕この章は、人の躁進と驕滿を戒むるなり、此二つ去り難き病なり、

企者不立。跨者不行。

〔字訓〕企は跂と同じ、踵地に著かず爪さきばかり地に著き疾く進むことを云なり、すべて人の疾く行くときは、踵地に著く暇なきなり、跨は大またぎにするなり、

〔解義〕怠らず行かば、千里の末も見ん、牛の歩のよし遲くとも、といへる如く、自然に任せ、當然を履まば、至る處までは終に至るべし、然るにもし富貴を貪り躁き進まんとする者は惑なり、

應知踵地に著かず疾く進まんとする者は、立つことを得ず、倒るべし、跨を大伸に疾く進まんとする者は、行くことを得ず、廢すべし、これ疾く進まんとする者は、進むことを得ざるのみならず、却て害あるに非ずや、

自見者不明。自是者不彰。自伐者無功。自矜者不長。其在道也曰餘食贅行。

〔字訓〕 行の字、註はおこなふの義とせり、然れども行形古通用す、大行山を大形山とかける類にても知るべし、故に今形の字となして解す、

〔解義〕 自らその美を見す者は、その美顯れず、自らその是をよしとする者は、その是彰れず、自らその功に伐る者は、その功消え、自らその善に矜る者は、その善保たず、於道はこれを物に譬ふれば、食の餘形の贅の如しと云へり、食美なれども餘となれば穢なり、形全けれども贅あれば醜し、もと有美有功有善ども、自らほこればそれが爲にあしき物となるなり、

物或惡之。故有道者不處。

〔字訓〕 物は人をさすなり、或とは誰ときまらず多きを云、

〔解義〕 それかく進むことを好み（初の一節をさす）、誇ることを好む（次の一節をさす）、ものは、世の人の惡む所なり、故に道を得たる人は、かゝる行には身を處ざるなり、

二十五章

〔章意〕この章は、大道の妙、見聞の及ぶべきにあらざるを云なり、

有物混成。先天地生。寂兮寥兮。獨立而不改。周行而不殆。可以爲天下母。

〔字訓〕物とは道をさす、然れどもこゝ隱語のやうにいひ出せるなり、

〔解義〕それこゝに一物あり、その物たるや、方に非ず圓に非ず、その形混然としていかなる形なるを認むべからず、然れども萬物みなその資に由て成り、花は花となり、實は實となる、（この一句をとく、有物混成）そもそもこの世界の始まりは、清めるは升りて天となり、濁るは降りて地となりて、天地開闢せるを始とす、然るにかの混然たる一物は、その天地よりも先に生じ、その始の始たるいつのころなることを知るべからず、（この一句をとく、先天地生）さてその一物は、寂兮にして無聲、寥兮にして無臭、それ聲は耳にきこゆるのみにして見るべからず、臭は鼻に徹るのみにして知るべからず、聲臭は微妙なるものなれども、それもなきなり、（この一句をとく、寂兮寥兮）陽の匹は陰あり、天の匹は地あり、日の匹は月あり、夫の匹は婦あり、凡そ萬物匹なきものはなし、只かの一物のみは、これに匹するものなく、唯我獨尊なるものなり、（この二字をとく、獨立）朝くれば頓て暮となり、春もいつしか秋となり、花も實となり、少も老となり、今の吾は昨の吾に非ず、變改は天地の習なり、然るにかの一物のみは、古より今に至るまで、常も變ることなきなり、（この二字をとく、不改）世に月影の至らぬさきはなしと云へども、物の蔭はのこすべ

し、風は推並吹くと云へども、屏障ある處は入らず、只この一物や、何方何處までも、周く行き渉りて至らざる所なく、しかも殆き害に逢ふことなし、（この周行而不殆の一句をとく、）それこの一物能く天地に盈てる萬物を生成するの功用あり、天下萬物の母と云べし、（この可以爲天下母の一句をとく、）

吾不知其名。字之曰道。強爲之名曰大。大曰逝。逝曰遠。遠曰反。

〔字訓〕名は形によつてつくものなり、四角なれば方と名づけ、まるければ圓と名づく、字は只よび稱へるまでのものなり、權兵衛も權の兵衛にあらず、八兵衛も八人の兵衛にあらず、只よび稱へるまでのものなり、（通稱を字なりと云へるは、伊藤東涯等、この說なり、）逝はゆくなり、上文の周行をさして云なり、反は本を離れざるを云なり、すべて行くものは本をはなる、道は周く行けども本をはなれず、故に反と云なり、

〔解義〕それかゝる奇しき一物は、形なければ吾その名を何と云べきを知らず、（この吾不知其名の一句をとく、）然れども萬物これに由て成る、それ由るべきものはみちなり、故にこれに字をつけて道とよぶなり、（この字之曰道の一句をとく、）その道と云へるもの、萬物の由る所なれば、さしも廣大無邊なり、故に強ひて名づけて大と云なり、（強爲之名曰大の一句をとく、）その道や、周く行て滯らず、大と名づくるも猶足らず、故に大と名づけたるその上に、又名づけて逝と云なり、（この大曰逝の一句をとく、）その周く行くところ、中途にして廢むことなく、至り屆かざる所なし、逝と名づくるも猶足らず、故に逝の上に又名づけて遠と云な

り、（一句を説く、逝曰遠のその用至らざる所なけれども、その行處に隨はず、その體本を離れずして獨立せり、遠と名づくるも猶足らず、故に遠の上に反と名づくるなり、（一句を説く、遠曰反のそれたゞ一の道なり、）強ひて名づけて大と云逝と云遠と云反と云、名に名を重ね、種種の名をつけたるは、言語道斷いひやうなきものなればなり、

故道大。天大。地大。王亦大。域中有二四大一。而王居二其一一焉。

〔字訓〕 亦はも亦とも云、略亦とも云なり、道天地にくらべては、人は小なるもの、故に王も亦と云へるなり、域はしきり構なり、域中とは、いひやうなき部類の中といふほどの意なり、道天地王は、何ともかとも稱へやうなく、言語道斷なるものなり、故にこれを域中と云なり、

〔解義〕 かるが故にこの世の中にては道は大なり、天は大なり、地は大なり、それになぞらへ王も亦大と云べし、凡そいひやうなきものゝ中に、この四の大なるものあり、人の形は小なれども、王は人の主なる故、王も亦其一によみこみて大なるものと云へるなり、

人法二地一。地法二天一。天法二道一。道法二自然一。

〔字訓〕 法とは不二違一を云なり、その通なるを云なり、

〔解義〕 山に居ては山のやうに爲し、里に居ては里のやうになし、宋に在ては章甫を冠り、（孔子のこと、）裸國に入るには袒ぎ、（禹のこと、）その地の宜しきに隨ふは、これ人は地に不二違一なり、（中庸下編に永土に又易は時と位の宜に隨ふを主とすることなり、）春に當り天より生ぜんとすれば、地これを枯らす能

はず、秋に當り天より枯らさんとすれば、地これを生ずる能はず、これ地は天に不違ものなり、天は道のまゝにして私を容るることなし、これ天は道に不違なり、道は萬物の自然なりにして、火の燃ゆるも自然なり、水の流るゝも自然なり、鳥の飛ぶも自然なり、魚の游ぐも自然なり、櫻の紅、菊の黄なるも自然なり、道は萬物の自然のまゝにしていろふ所なし、これ道は自然に不違なり、それ人は地にしかず、地は天にしかず、天は道にしかず、道は自然にしかず、貴きものは自然なり、萬物萬事、只自然に任すべし、人の妄作を加ふべからず、

〔餘論〕唐國にて所謂の三教は、孔老釋の教なり、儒教の本は、道の一字なり、老教の本は、自然の二字なり、佛教の本は、因果の二字なるよし、さて老教の自然の説、しば〳〵出づ、今亦贅すべきなし、但一説あり、たとへば花の春開く如きは、自然なり、その花を窖に入れ暖かにして冬開かしむる如きは、人爲なり、自然にあらず、又その花に土を培ひ水を灌き、日蔽雨除のせわするは、人事の當然なり、その中、土も培はず水も灌がず捨置て、思の外によき花の開くは、偶然なり、萬のこと皆この自然當然偶然の三つあり、偶然は昏暗に打てる鐵炮玉の敵の頭に中るが如し、偶中なり、僥倖なり、當にすべからず、故にたゞ人事の當然を盡して、その物々の自然を全くし、麥は冬生て夏熟し、稻は春生て秋熟するを得せしむる、これを無爲の道と云、六十四章に云、輔萬物之自然、卽これなり、

二十六章

〔章意〕此章は、人君の輕く躁がしきを戒むるなり、

重爲輕根。靜爲躁君。

〔解義〕落著たるものは、よく輕しき者を使ふ、これ重は輕の根たるなり、靜なるものは、よく躁がしき者を使ふ、これ靜は躁の君たるなり、

是以君子終日行。不離輜重。雖有榮觀。燕居超然。

〔字訓〕輜重は衣服雜具をのする車にて、常に後にあり、榮觀は他說には紛華の觀と云、その說にては、この二句の意、貴人は花見物見にも出で玉はず、それらのことを離れて超然として在すを云なり、河上公註の意は、榮觀は美麗なる宮室を云なり、燕處は內に居玉ふを云なり、

〔解義〕それ靜重は貴ぶべし、故に君子は輕しくさわがしきことなし、外に行き內に居る、みな然り、君子終日出行くとも、鹵簿の前に出て玉ふことなく、いつも後の方に在すなり、うるはしき宮觀あれども、それに出で遊び居玉ふことなく、內にありてさらりと遠くはなれ居玉ふなり、

奈何萬乘之主。而以身輕天下。輕則失根。躁則失君。

〔解義〕奈何ぞ貴き萬乘の君に在て、其身を以て天下に輕しくし人のさきに出で玉ふや、ゆめ〳〵あるまじきことなり、輕しければ、根たる道を失ひ、衆をつかふことはなるまじきなり、躁がしければ、君たる道を失ひ、人を御することはなるまじきな

り、これよく心し玉ふべきことなり、

二十七章

〔章意〕この章は、聖人の作用、人を救ひ物を救ひ、棄人棄物なきを云なり、

善行無轍迹。

〔字訓〕善とは天性自然に順ふをさして云なり、轍は車輪のあと、迹は足あと、二つともに跡かたありて目立つを云なり、

〔解義〕夏は葛、冬は裘、あるべき自然の行なり、更にめだつところなし、もし夏の暑に裘をきて、冬の寒に葛をきば、目立ち怪しみ狂夫とも云べし、

善言無瑕謫。

〔解義〕是は是と云非は非と云は、あるなり自然の詞なり、さらに瑕なく謫めらるゝところなし、もし是を非といひ非を是といはゞ、きずとしとがめらるべし、

善數不用籌策。

〔字訓〕籌策とも箸の如くにして、數とりに用ゐるものなり、

〔解義〕菊山棠の七重八重、木槿牽牛花の一重なる、その數多きも少きも、天性自然あるなりにて、籌策を用ゐて計ふるに及ばざるなり、

善閉無關楗而不可開。

〔字訓〕 關は横にさし、楗は竪にさす木なり、みな閉づるしまりなり、楗又作鍵、木と金とのたがひのみ、その義は同じ、

〔解義〕 花の蕾、貝の合、天性自然に閉ぢたるなり、横に竪に扃さざれども、開くべからず、

善結無繩約而不可解。

〔解義〕 藤蘿の蔓の絡へる、天性自然に結べるなり、繩もて約ることを用ゐざれども、解くべからず、

是以聖人常善救人。故無棄人。

〔字訓〕 救とは救ひ止むるなり、人のあしくならざるやうにするなり、

〔解義〕 すべて自然なりなるは、至れり盡せり、是を以て聖人は、いつも（この三字帯をとく）その天性自然に順て、無理なるしむけなく、（善の字をとく）人々惡くならざるやうになし玉ふ、（二字を数人のとく）故に人みなそれ〳〵の用に立ち、棄つべきやうなる人なきなり、

常善救物。故無棄物。

〔解義〕 いつも（字を帯のとく）、物の天性自然なりに順て、（字を善のとく）惡くならざるやうになし玉ふ、（二字を数物のとく）、故に物みなそれ〳〵の用に立ち、棄つべきやうなる物なきなり、金は貨、玉は費、石は礎、瓦は屋、よきもあしきも何一つ棄つべきものはなきことなり、

是謂襲明。

〔字訓〕襲は因襲そのまゝ因り用ゐることなり、明は天性に會得したる所を云、雞の司晨、犬の守夜如きを云、人に於ては、その人の長じ得手なる所を明と云なり、

〔解義〕盲者は樂を掌らしめ、聾者は火を司らしめ、柔なる者は文官とし、剛なる者は武官とす、是をその天性長じたるを明の字を襲の字をと、因り用ゐる字をと、と謂ふなり、論語に、及其使人也器之とは、卽この意なり、古聖人用人の道、この襲明の二字に盡きざるなし、實に貴ぶべき金言なり、

故善人者。不善人之師。

〔解義〕もし世に孔子なくんば、三千の徒も、君子とはなるまじきなり、もし世に釋尊なくんば、五百の羅漢も、凡夫にて終るべきなり、この故に善人は不善人の師なり、不善人は善人の庇にて善人とはなれるなり、

不善人者。善人之資。

〔字訓〕資は王註はとり用ゐるの義、一說に助とす、今その說に從ふ、

〔解義〕桀紂惡王なり、故に天下の民、みな湯武に歸するなり、もし桀紂惡王ならずんば、湯武聖人の德、世に目立たず、天下みな歸ずることはあるまじきなり、然れば桀紂の惡は、やがて湯武の資となれるなり、これ不善人は善人の資なり、譬へば美女の

み打ちよらんには、いづれ菖蒲と引ぞ分たん、美女も見分けがたかるべきを、醜女あればこそ、美女のうるはしきも一入目立ち、醜女は美女の助けなるが如し、

不貴其師。不愛其資。雖智大迷。

〔解義〕善人あればこそ、我も善人となれ、不善人あればこそ、我善も世に目立て、然るをその師となる善人を貴ばずして疎略にし、その資となる不善人を愛せずして疾み嫌ふは、假令その人智ありと云へども、大に迷ひ惑へるのしかたなり、

是謂要妙。

〔解義〕師を貴び資を愛す、これを簡要微妙なるしかたと謂ふなり、

〔餘論〕東照公の語に、どくだめと云草は、臭もあしく食ふべからざるものなれども、これをほして藥に用ゐれば、十藥と云、功能多し、人を用ゐるも、用ゐ方にて用立つものなりと、これ無棄人の訓なり、

二十八章

〔章意〕この章は、聖人の妙用を反覆述ぶるなり、

知其雄。守其雌。爲天下谿。爲天下谿。常德不離。復歸於嬰兒。

〔字訓〕雄は剛強ものなり、雌は柔弱ものなり、爲天下谿は、谿は

低き處にて水などの歸し聚る處なり、世にはびこるは人のにくむ處なり、柔弱なるものとなりてあれば、天下の人慕ひ歸すること、谿に物の歸するが如しと云、王註の意は如此、朱子の說は、高きを好むは人の常なり、然るに高きは危しと思ひて、己は低下、谿の如き處に居るなり、谿はたゞ低下の義にとると云、今姑く朱子の說に從てとく、常德はかはらぬ德を云なり、嬰兒は無智なるを云なり、

〔解義〕剛强なるべき道を知りて、只管に剛强なるは淺し、貴ぶに足らず、必や其剛强なるべき道を辨へながら、柔弱なるものとなりて、天下の人に高亢ことなく、天下の低下となるなり、天下の低下となれば、常德を保ち得て、嬰兒の無智無欲の場に復るなり、

知二其白一。守二其黑一。爲二天下式一。爲二天下式一。常德不レ忒。復二歸一於無極一。

〔字訓〕白は智慧の明かなるなり、黑はおろかなるなり、

〔解義〕智慧の明かなるべき道を知りて、只管に智慧を奮ふは淺し、貴ぶに足らず、必や智慧を出すべき道を辨へながら、智慧を出さずして、おろかに昧きものとなり、天下の式となるなり、天下の式となれば、常德忒はずして、窮りつまることなき場に歸るなり、

知二其榮一。守二其辱一。爲二天下谷一。爲二天下谷一。常德乃足。復二歸一於樸一。

〔字訓〕榮ははれがましく立派なること、富貴榮華の類なり、辱

はそのうちなり、みぐるしく汚賤なるを云なり、樸は天性をさすなり、

〔解義〕富貴榮華なるべき道を知りて、只管に榮華に誇るは淺し、貴ぶに足らず、必やその榮華なるべき道を辨へながら、賤しくみぐるしき方を守り、天下の谷となり、低下に身をおくなり、天下の谷の如くなれば、常德乃そなはりて、その天性にかへるなり、

樸散則爲器。聖人用之。則爲官長。

〔字訓〕散は分散なり、いろ〳〵に分るゝなり、器は用だつものなり、

〔解義〕人々の天性、いろ〳〵と分るれば、弓いるもあり、馬にのるもあり、もの書くあり、算をなすあり、各用立つものとなりて如器なり、聖人それを用ゐ玉ふには、官長を立てゝ司どらしめ、各その用にかなふものとならしむるなり、

故大制不割。

〔字訓〕制は仕立てるなり、大制とは、手をつけずその物の天性に持ちゐるなりにするなり、

〔解義〕聖人はその物の天性なりに仕立てゝ、我より好を出し、我心の如くなれと割り傷ふことなきなり、

〔餘論〕雄雌黑白榮辱、その切要なるを以て、反覆して說きたるは、一片の老婆心より出づるなり、周易には、剛なるものゝ剛で通し、柔なるものゝ柔で通すをよしとせず、乾の用九、見群龍无

首吉。剛なるものゝ能く柔なることを貴び、坤の用六利永貞。柔なるものゝ能く剛なるを貴ぶなり、剛も一本生の剛にあらずして甘みあり、柔も心なしのべたゝに非ずして手ごたへあり、その意ほゞ近し、筆に綿裏針と云へるあり、此章の意、やゝもすれば如此なるべきか、これ黄老の教の外より測られざる人となる所以なり、朱子の姦智に流ると云は、これ等をさして云なるべし、然れども老子姦智を教ふるにあらず、

二十九章

〔章意〕この章は、天下を治むるもの、智巧作爲を用ゐるべからざるを戒むるなり、

將欲取天下而爲之。吾見其不得已。

〔字訓〕取は漢の高祖の語の乃公以馬上取天下、安用詩書とある取の字の意にあらず、左傳に取我田疇、史記に取高帝約束而紛更之とある取の字と同じ、つかまへてと云ほどの意なり、かるくみるべし、爲之は、手をつけるなり、不得とは、猶曰失也、できぬことなるを云なり、

〔解義〕凡そ天下を治むる者、天下の萬物をつかまへて、上より手を下し、これを己が心の如くならしめんとするは、吾其決してできざることなるを知るなり、その故いかんとなれば、下文へ、

天下神器。不可爲也。

〔字訓〕神は無形無方測られざる所あるを云なり、器はもとよせて出來たるものなり、譬へば酒の樽は、木と竹と釘とをあつ

めよせて樽となれり、萬の器みな然り、故に器とはよせものと云如し、不可爲とは、手のつけられざるを云なり、

〔解義〕天下の天下たる所以は、いかなるものと尋ぬれば、峙つものは山なり、流るゝものは水なり、動くものは人物なり、植るものは草木なり、これぞ天下なると云形なし、これ神なるものなり、爾してそのあらゆるかゝるものをよせ集めて、これを天下と云、天下はよせものなり、これ器なり、固より千差萬別にて、己一人の好みの如くなるべきやうなし、手ざしのならざるものなり、

爲者敗之。執者失之。

〔字訓〕執は執り守りて動かさぬ樣にするなり、失之はしそこなふなり、

〔解義〕萬物各自然の性あり、その自然の性に順ふべし、我より手をつけて爲すべからず、苗の成長の遲しとて、手もてこれを引きぬかば、苗は枯るべし、鳩の巣の拙しとて、手もてこれを作りたてやらば、鳩は恐れて來らざるべし、爲者敗之なり、筍の生ずるを壓へなば、筍は枯るべし、水の流るゝを障へば、水は腐るべし、執者失之なり、

故物或行或隨。或歔或吹。或强或羸。或挫或隳。

〔字訓〕歔はゆるやかに吹く、吹はつよく吹くなり、

〔解義〕故に天下萬物のすがた一樣ならず、前となりて行くあり、後となりて隨ふあり、ゆるく吹くあり、つよく吹くあり、强き

あり、よわきあり、挫くるあり、やぶるゝあり、千差萬別、吾これを
いかんせん、たゞその自然に任すべし、

是以聖人去甚去奢去泰。

〔字訓〕甚奢泰の三字、王註は賢能美色の人にすぐれ、又は難得の貨などなり、それを去り〳〵て人の惑はぬやうにすること と云へり、一說に甚奢泰は、たゞ甚しきを云なり、奢はものごとの大そうなるを云なり、漢の黃霸傳に、凡治道去其甚泰者耳。先儒曰、その言此本文に本づく、言心は事有大過者去之。小而無害者。不必改作。今この義に從ふ、

〔解義〕こゝを以て聖人は、物の自然に順て、我より手を下して爲すことなく、只其甚しきを去り、害なからしむるのみ、

from this Chapter

三十章

〔章意〕この章は、强壯に過ぐるを戒むるなり、唐土にては楚の靈王、秦の始皇、吾朝にては木曾義仲、武田勝頼、今川義元、一旦火の焰々たる如き勢にて忽ち消ゆるは、みなこの戒を犯せる人なり、

以道佐人主者。不以兵强天下。其事好還。

〔字訓〕好還、王註には、無爲の道に還ると云、諸說、天道好還、善惡吉凶、人にしむけるほどのことは、その身に還り報ゆるなりと、今その說に從ふ、

〔解義〕それ無爲の大道を以て、人主を佐くるものは、吾兵威の

強きとて、その威を天下に奮ひ、強きものとならざるなり、我もし強く威を奮ひ人を害すれば、人よりも亦我を害して、そのこと好還ものなればなり、

師之所處。荊棘生焉。大軍之後。必有凶年。

〔解義〕用師の地は、農夫も耕稼の暇を得ず、荊棘生じて茫々たる曠野となるべし、はた又殺氣天地の和氣を傷ひ、大軍の後は、必凶年の災あるものなり、實に兵は凶器、戰は逆德、好むべきものに非ず、

故善者果而已。不敢以取強焉。

〔字訓〕果ははたすなり、しおほせる意、大難を救ひおほせるを云、

〔解義〕故に兵を善く心得たるものは、天下萬民塗炭の難を濟ふのみ、敢て強き者となり我威を奮ふことはせざるなり、（以上本文をと）く、昔平氏禁庭の難を濟ひ、それより遂に威を奮ひ、末後西海の魚腹に葬るの禍を受けしは、この教を知らざればなり、

果而勿矜。果而勿伐。果而勿驕。果而不得已。果而勿強。

〔解義〕濟難て其能に矜ることなかれ、濟難て其功に伐ることなかれ、濟難て其勢に驕ることなかれ、濟難て我不得已なり、好て事を興すに非ず、濟難て強く威を奮ふことなかれ、

物壯則老。是謂不道。不道早已。